会報
特攻
平成25年5月

第95号

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
〒102-0073　東京都千代田区九段北3-1-1靖國神社遊就館内・地階
電　話　03（5213）4594
ＦＡＸ　03（5213）4596
http://www.tokkotai.or.jp
振替口座　00140-6-59580

編集人　飯田正能
発行人　羽渕徹也
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

第34回特攻隊合同慰霊祭

平成25年3月30日（土）11時～12時
於　靖國神社拝殿・本殿

式次第

国歌斉唱　トランペット　堀田　和夫
修祓・献饌
祝詞奏上
祭文奏上　理事長　杉山　蕃
献吟　一誠流　石橋　一歌
笛　逢坂　龍信
奉納演奏
世田谷コール・エーデ合唱団
特攻隊慰霊顕彰会男性合唱団
指揮　大穂　孝子
トランペット　堀田　和夫
「さくら」「ふるさと」
「我が戦友よ」「同期の桜」
全員斉唱　「海ゆかば」
トランペット　堀田　和夫
昇殿参拝　参列者一同
（「国のしずめ」
トランペット　堀田　和夫）

◇　◇　◇

献吟　吟　石橋　一歌
笛　逢坂　龍信

第76振武隊隊長　岡村　博二

昭和20年4月28日沖縄周辺洋上で戦死
いつの世も国守るものは若人の
止むに止まれぬ大和魂

第1神雷攻撃隊　棚橋　芳雄

昭和20年3月21日鹿屋南方洋上で戦死
若鷲は南の空に飛び立ちて
還るねぐらは靖國の森

目次

第34回特攻隊合同慰霊祭 …… 1
東日本大震災二周年追悼式 …… 6
神風特別攻撃隊第一、第二
御楯隊と硫黄島 …… 8
帝都防衛の空に散った成増・陸軍
飛行第47戦隊の勇士達 …… 11
特集・特攻インタビュー（第9回）
海軍水中特攻
海老澤善佐雄　氏 …… 22
オペラになった特攻隊の物語
「KAMIKAZE―神風―」 …… 31
智恵子さんとのこと
―「土田知子」のモデルと
なった女性の実像― …… 33
特攻コラム（その一） …… 35
平成25年度第1回理事会及び
定時評議員会等報告 …… 36
事務局からの報告等 …… 39

祭文

本日ここに靖國神社の御社頭に、御来賓の皆様の御臨席と御遺族、戦友、そして関係者の皆様が相集い、第34回特別攻撃隊合同慰霊祭を挙行するに当たり、謹んで在天の御英霊に申し上げます。

戦いが終わり、既に68年の歳月が流れんとしております。思えばこの間、戦争によって疲労し破壊された、文字通り焦土極貧の状態から復興が始まりました。ここに一部御参集しておられます、英霊の皆様の戦友・同期・同輩の方々がその中核として、粉骨砕身、見事に奇跡的復興を成し遂げ、世界に誇れる隆盛を我が国にもたらされました。この活動力の根源は、民族的資質、忠誠心、復興への深い思い等でありましょうが、若くして国に一身を奉じた皆様への同期・同輩としての、責任感が大きく寄与したことと忖度致すところであります。また、同時に御遺族、戦友の方々が、戦後独特の反戦・左翼的症候群とも言える異様な雰囲気がある中、皆様への追悼事業に人生の誠を捧げて来られたことも、忘れることはできません。

しかし、時の流れは厳粛なもの、この日本を支えてきた方々の高齢化、数的減少に伴い、真の貧困を知らない、そして、我が国の伝統的美徳を知らない世代が社会の中心となるにつれ、我が国の繁栄に陰りが見えてきたことも残念ながら事実であります。

現下の我が国には、問題山積ですが、中でも憂慮すべきは、東日本大震災の復興と、平和国家として再出発した我が国の領土・領海・領空主権への、周辺国の侵害であります。前者は地震・津波の災害に加えて、原子力発電所事故による放射線被害をもたらしました。あれから2年の月日が流れましたが、復興は遅々としております。68年前に我々が被った体験、零からの出発に思いを致し、思い切った施策で復興の槌音を高くせねばなりません。

北方領土・竹島・尖閣という我が国固有の領土への近隣諸国の態度・対応は、平和国家として再出発した我が国の行き方を踏みにじる行為であります。これに対する我が国の対応は、毅然たる姿勢に乏しく、宥和的態度に終始しております。これは、独立国家として最も重要な民族の誇り、矜持といった観点からは、残念な状況にあります。恐らく、一身を投げ出された英霊の皆様に申し開きのできる状況なのか、大いに疑問を感じるところであります。

世代交代が進み、英霊の皆様が生を共にした方々は、その数を減らしつつありますが、後に続く世代の私どもは、英霊の皆様が辿られた厳しい現実を忘れることなく、己の生き方を自励・振作する起点としなければならないこと、そして、社稷・国の現実が、果たして英霊の皆様に御満足頂けるものなのかという判断基準を大切にすることの二点を中核に、これからも、国の不可決の事業として、この慰霊顕彰を継続発展して参る所存であります。

今年は、桜が早く咲きました。ここ靖國の桜となってまた会おう、と誓って殉じた心情に思いを致す時、英霊の皆様方に一層の敬意を表明して祭文といたします。

平成25年3月30日

公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会
理事長　杉山　蕃

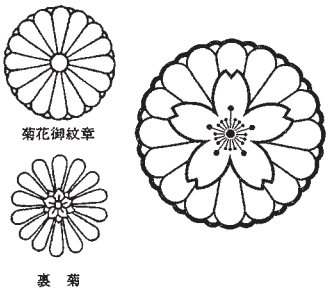
◇　◇　◇

3月30日（土）11時より靖國神社において、当顕彰会恒例の第34回特攻隊合同慰霊祭が厳粛に斎行され、御遺族28名を始め来賓、戦友、一般会員等合わせて230余名が参集して、英霊奉慰の誠を捧げた。

この日、靖國の宮居の桜は、3月16日の開花宣言（東京の開花宣言は毎年、靖國神社の能楽堂脇にある標準木・ソメイヨシノザクラの老木に数輪の花が開いたのを、気象庁の職員が確認して行われる）から2週間を経てなお見事に咲き誇り、英霊の遺徳顕彰に相応しい雰囲気を醸し出していた。昨年の合同慰霊祭当日（3月24日）は、春なお浅く、桜の蕾は未だ膨らまず、冷雨のそぼ降る中での慰霊祭であったが、東日本大震災から1周年、未曾有の災害からの復興・再生への誓いを新たにするに相応しい、峻厳の気に満ちた雰囲気の中での慰霊祭であった。

あれから更に1年余の歳月が流れたが、復興は未だ遅々として進まず、再

生への途は程遠い。去る3月11日の政府主催による「東日本大震災二周年追悼式」において、天皇陛下は「被災者のことを常に見守り、その苦しみを、少しでも分かち合っていくことが大切だとの思いを新たにしています」との優渥なるお言葉を賜ったが、我々も被災者と苦難を共にし、被災者一人ひとりの上に1日も早く平安な日々が戻るよう力を尽くさなければならない。



靖國神社の桜、それは英霊の依代である。古来日本語では、サは早苗、早乙女など神聖な音であり、さくら、さかずき、さかな、さらなどすべてさの字の付くものは、神との関わりを持つと考えられる。また、クラは座、神霊の依代を表し、巌や樹木は神の宿るところとされている。つまり、桜こそ、神の宿る神聖な木、神木とされてきたのである。

故松本武仁画伯（陸士61期）の特攻絵画展示と同期の中江仁評議員（左）・関口正孝会員（右）

また、靖國神社の御紋章は、菊と桜である。十六重弁の菊花と五弁の吉野桜の花を重ね合わせたものである。言うまでもなく、十六重弁紋様の菊花の御紋章は、天皇家の御紋章であり、十六弁裏菊紋様の御紋章は、宮家共通の御紋章である。天皇家の御紋章である十六重弁菊花紋は、鎌倉時代の初め、後鳥羽院（上皇）（天皇御在位・第82代一一八三～一一九八年、上皇御院政一一九八～一二二一年）が各地の刀鍛治の名工25名を召され、仙洞御所で太刀を打たせられた、いわゆる御番鍛治に由来すると言われている。その時、後鳥羽院も自ら淬刃（刀身に刀紋を付ける工程）を試みられ、完成した太刀の茎に十六重弁菊花紋を銘に代えて刻まれたという。この後鳥羽院の作刀は「菊の御作」と呼ばれ、その一振りは摂政藤原良経（九条家の祖）に下賜された。九条家では家宝として代々大切に保管され、明治維新後は明治天皇に献上されたが、現在は上野の国立博物館に納められており、誠に見事な一振りで、その優雅な太刀姿は、刀剣というよりは神器と言うべき気品と美しさを備えていると言われている。

靖國神社の御紋章は、天皇家の御紋章であるこの十六重弁の菊花に抱かれた桜の紋章であって、皇室の御加護と御親愛の篤さを偲ばせる紋様である。

また、この日、靖國神社遊就館前の「特攻勇士之像」には生花が供えられ、未だ花冷えの残る春風に飛行帽を靡かせ、遥か南の空をきっと見上げ、決意の程を眉宇に漲らせて、しっかと大地を踏み締めて立つ若武者の姿に、一入の感動を覚える。国家存亡の危機に際し、何ものをも怖れず、怯まず、只一筋に征く若き特攻隊員の勇姿を真に良く表している。この像の原型の製作者は、彫塑界の大御所で、文化勲章受賞者の北村西望氏であり、その原型に基づき、日本芸術院会員北村治禧氏の監修により日展会員石黒光二氏が制作したもので、平成11年3月23日、当会から当時の瀬島龍三会長以下会員等63名、神社側からは湯澤宮司以下の出席を得て除幕式を行ったものである。更にまた、台座表面の銅板に「特攻勇士之像」と刻まれた銘文の揮号者は、日本画壇の重鎮で、平成18年に文化勲章

献歌　世田谷コールエーデ合唱団・
特攻隊慰霊顕彰会男性合唱団　指揮　大穂孝子氏

祭文奏上　杉山蕃理事長

トランペット演奏　堀田和夫氏

献吟　石橋一歌・逢坂龍信両氏

を受章された大山忠作画伯であり、同画伯は、昭和18年に学徒出陣のため、東京美術学校（現東京芸術大学）を繰り上げ卒業して入隊、特別操縦見習士官（3期）となり、台湾で終戦を迎えた方であり、靖國神社の大野俊康元宮司（第7代・平成4年～9年）とは特操同期生で、同元宮司の仲介によって揮号を引き受けられた経緯があり、大野元宮司と共に当会とは極めて縁の深い方である。

また折しも、靖國神社・遊就館1階の企画展示室では、昨年の「大東亜戦争七十年展」に続く平成25年遊就館特別展「大東亜戦争七十年展Ⅱ」が開催（平成25年3月16日～12月8日）されている。「開戦以来日本側に有利であった攻防は、ミッドウェー作戦の失敗から太平洋上の制海・制空権を失い、ガダルカナル島を始め、ニューギニアなどの南東方面、更に北方の諸島では、補給支援も途絶え、武器・弾薬も乏しい中で熾烈な戦いが続けられた。祖国の行く末を信じ、アジア諸国の解放と共存共栄の新秩序を擁立するという理想に燃えて、雄々しくも勇戦奮闘された数多の先人達の御事跡を是非この機会に御拝観いただきたく存じます」とある。大東亜戦争の原因、目的、戦争の経過、その実相、敗戦の原因等々を知る上で、この企画展は非常に貴重なものである。戦略、戦術双方の指導者の無策、判断の誤りが、あたら多くの純真な若者達の命を奪った。至誠殉国の信念に燃える若者達は、如何なる悪条件の下でも死力を尽くして戦い、散華して逝ったのである。その志の一端を知り、託された未来への遺志を継いで祖国再建に尽くさなければならない、との思いを改めて強く抱くものである。

参集殿では、昨年秋の世田谷山観音寺における年次法要でも展示された、故松本武仁画伯（陸士61期）の特攻絵画十数点が、同期生・中江仁評議員の指導で展示され、参集した人々の目を惹いた。

合同慰霊祭は、トランペットの伴奏による国歌斉唱に始まり、修祓・献饌・祝詞奏上の神儀に続き、杉山蕃理事長が祭文（別掲）を奏上、「戦後68年の歳月が流れる中で、戦後の我が国の復興と発展を担った先輩方の高齢化とともに、我が国は、相対的に発展の速度を鈍らせ、更にまた、東日本大震災と原発事故による大被害からの復興・再生、加えて周辺諸国からの領土・領海・領空の侵犯などへの対処等大変な難局を迎えつつある。慰霊事業においても、その中核となってこられた戦友世代の

喪失という厳しい現実がある。しかし、国家存亡の危機に際し、生命を擲って国に尽くされた英霊の御心情と残された戦友の方々の復興への偉大な努力、営々と続けられた慰霊事業への誠の心を、我々は尊敬の念を持って継承し、後世に伝えていかなければならない。このことこそ我々の務めと心に刻んで努力していく」と誓った。

挨拶　杉山蕃理事長

挨拶・乾杯　佐藤正久参議院議員・防衛政務官

献吟の声は、朗々として神前に木霊し、惻々として胸に迫る。大穂孝子女史の指揮による世田谷コール・エーデ女性合唱団の献歌「さくら」「ふるさと」、特攻隊慰霊顕彰会男性合唱団の献歌「我が戦友（とも）よ」「同期の桜」、また、強く胸を打つ。最後は、寥々と響くトランペットの伴奏に合わせて、一同「海ゆかば」を唱和する。

会務報告　衣笠陽雄専務理事

特攻隊慰霊顕彰会男性合唱団「我が戦友よ」指揮　大穂孝子氏

次いで、参列者全員、本殿に昇殿して参拝し、トランペットの演奏「国のしずめ」に合わせて黙祷を捧げ、滞りなく慰霊祭を終えた。

◇　◇　◇

第34回特攻隊合同慰霊祭懇親会
平成25年3月30日（土）
12時30分～14時
於「靖國会館」2階「田安の間」・「玉垣の間」

開会の辞（司会）　事務局長　羽渕　徹也
理事長挨拶　理事長　杉山　蕃
会務報告　専務理事　衣笠　陽雄
来賓紹介　事務局長　羽渕　徹也
乾杯　来賓代表　参議院議員　佐藤　正久
懇談会食
全員斉唱「海ゆかば」
トランペット　堀田　和夫
万歳三唱　来賓代表　菅原　道之
閉会の辞　専務理事　衣笠　陽雄

◇　◇　◇

慰霊祭終了後、「靖國会館」に移動し、同会館2階の「田安の間」・「玉垣の間」において、懇親会が開催された。

懇親会に先立ち、まず杉山理事長が挨拶に立ち、我が国を取り巻く、国内外の厳しい現実の中にあって、我々後輩に当たる世代が、先輩方の遺志を受け継ぎ、日本の復興・再生と慰霊事業への誠の心を継承していかなければならない、と強調するとともに、最近の出版界でブームを呼んでいる百田尚樹著『永遠の0（ゼロ）』（講談社出版）が、今年映画化されることが決まり、更に版を重ねて160万部を突破する勢いにあることを紹介し、このような特攻隊員を扱った本がブームを呼んでいるということは、戦争を知らない若い世代にも「特攻」に関心を持っている人々が非常に多いことを意味するものであるから、これらの人々を会員に呼び込んで、特攻の真実を伝え、慰霊・顕彰の輪を拡めていきたい」と訴えた。

次に、一昨年の公益財団法人移行に伴い、定款上総会の規定はなくなったが、この機会に、当慰霊顕彰会の運営状況を会員に広く周知し、御支援、御協力をお願いするため、衣笠専務理事から当会の活動現況に関し、平成24年度の事業報告と平成25年度の事業計画、会員の動向等について説明があり、今後ともなお一層、会員の増強、事業の活性化に努力し、引き続き「特攻勇士之像」の全国護国神社への奉納事業を更に推進させたい、と述べた。

続いて、懇親会に移り、羽渕事務局

長から来賓等の紹介がなされた後、来賓を代表して、参議院議員・防衛大臣政務官佐藤正久氏が挨拶を兼ねて乾杯の音頭を取られた。佐藤参議院議員は、イラク派遣自衛隊の、ヒゲの隊長と呼ばれて困難な任務を遂行され、現地住民からも大きな信頼を寄せられてイラクの復興支援に貢献された。「故山本卓眞会長の恩義に報い、その御遺志を継いで、国防の任をしっかりと果たすべく、全力を傾注する」と力強く挨拶をされ、英霊に対し、敬意と感謝を込めて献杯するとともに、慰霊顕彰事業の継続発展と会員の健勝を祈って乾杯の音頭を取られた。

その後和やかな直会の宴は始められたが、途中、今回より登場した特攻慰霊顕彰会男性合唱団による「我が戦友（とも）よ」と題する出陣学徒戦没者の鎮魂歌の合唱が再び披露されるなどして大いに盛り上がった。この歌の作詞、作曲者は不詳であるが、昭和48年の秋、第14期飛行予備学生を始めとする、五科連合による学徒出陣30周年記念の会合の際、戦没同期生のために歌われたという、戦没戦友を悼む戦友愛の籠もった秀歌であり、一同もこれに和した。

最後は、来賓を代表して、福岡偕行会会長菅原道之氏（陸士57期）の力強い音頭で、聖寿万歳を三唱して会を締め括った。

なお、この懇親会には、慰霊祭の受付業務や案内等のボランティア活動を引き受けてくれた若い有志グループや学生達も参加し、各テーブルでは、特攻について、あるいは日本人の心や教育について語り継ごうとする老兵達の話に熱心に耳を傾けていた。これもまた特筆に値することであった。

（飯田正能記）

東日本大震災二周年追悼式

平成23年の東日本大震災から二周年を迎えた3月11日（月）、全国各地で追悼式が行われ、参列者は犠牲者の冥福を祈り、一日も早い被災地の復興と被災者の生活再建を誓った。

追悼のお言葉を賜る天皇陛下

政府主催の追悼式は、同日午後、東京都千代田区の国立劇場において、天皇、皇后両陛下御臨席の下に行われ、岩手、宮城、福島3県の遺族代表34名のほか、安倍晋三総理大臣ら三権の長、各国大使など外交関係者約150名を含む約千名が参列し、犠牲者の冥福を祈り、復興・再生への誓いを新たにした。

安倍総理は、式辞の中で「災害を教訓とし、我が国全土にわたって災害に強い強靭な国づくりを進めていくことを固くお誓いいたします」と決意を述べた（総理大臣式辞の要旨は別掲）。

午後2時46分、全員が起立して黙祷を捧げた後、両陛下は慰霊の標柱の前に進まれて黙礼をされ、天皇陛下からは「困難に耐えている被災者の姿には、常に深く心を打たれ、この人々のことを、これからも常に見守り、この苦しみを、少しでも分かち合っていくことが大切だとの思いを新たにしています。」また、「被災者一人びとりの上に一日も早く安らかな日々の戻ることを共に願い、御霊への追悼の言葉といたします」とのお言葉を賜った（追悼のお言葉の全文は別掲）。

「遺族のことば」では、母を失った岩手県の高校2年生、山根りんさん（18）が、「人の役に立つことが使命と考え、自然災害の発生した国々で、被災体験を活かした支援活動ができる人材となり、大震災が辛い記憶としてだけではなく、未来に繋がる記憶となるよう、私たち若い世代が行動していきます」と、悲しみを越えて、健気な決意を述べた。

妻と幼い息子を亡くした宮城県の西城卓哉さん（32）は、「残された年月をかけて、愛する二人の人生の続きを私が歩んでいこうと思います」と語った。

福島県の八津尾初夫さん（63）は、「課題は山積、前は見えませんが、本日を一つの節目とし、故郷再生、再興のために努力していくことをお誓いします」と話した。

昨年の一周年追悼式では、台湾が約200億円の義援金を寄附していながら、会場で名前を呼ばれる「指名献花」の対象にならなかったが、今回は台北駐日経済文化代表処の代表が、各国駐日大使らと共に献花した。一方、中国、韓国の代表は出席しなかった。

中国外務省の華春瑩（フアチュンイン）副報道局長は11日、日本政府が東日本大震災二周年追悼式の「指名献花」の対象に台湾を加えたことに抗議する内容の談話を発表した。華副報道局長は、中国の代表が追悼式に出席しなかったことには言及しなかったが、欠席は台湾の処遇への反発が理由とみられる。昨年は、当時の野田政権が、指名献花から台湾を外したが、今年は安倍政権が台湾を対象に加え、会場内の席も、各国代表団や国際機関と同じ場所に移動させた。華副報道局長は談話で「日本の対応に強烈な不満と抗議を表明する」と反発し、「『二つの中国』を作り出そうとする如何なる国家の企みにも断固として反対する。日本が過ちを正すよう求める」と述べた、と報道されているが、地域の代表としての台湾の温かい支援に対する感謝を込めての対処であって、日本政府の対応は全く道義上当然の処置であり、それに対する全く謂れのない抗議であって、追悼式を政治利用しようとする中国の脅しには、断固反対を表明すべきである。

なお、警察庁のまとめによると、3月11日現在、東日本大震災による死者は、1万5882人、行方不明者は、2668人。復興庁の調べによると、2月7日現在の避難者数は、31万5196人である。

（飯田正能記）

◇

天皇陛下のお言葉（全文）

本日、東日本大震災から二周年を迎えるに当たり、ここに一同と共に、震災によりかけがえのない命を失われた多くの人々とその遺族に対し、改めて深く哀悼の意を表します。

二年前の今日、東日本を襲った巨大地震とそれに伴う大津波により、二万人を超す死者、行方不明者が生じました。震災後に訪れた被災地では、永年にわたって人々が築いてきたふるさとが痛々しく破壊されており、被災者の悲しみはいかばかりかと察せられました。一方、この厳しい状況の中、被災地で、また、それぞれの避難の地で、気丈に困難に耐え、日々生活している被災者の姿には、常に深く心を打たれ、この人々のことを、私どもはこれからも常に見守り、この苦しみを、少しでも分かち合っていくことが大切だとの思いを新たにしています。

この度の大震災に際して、厳しい環境の下、専心救援活動に当たった自衛隊、警察、消防、海上保安庁を始めとする国や地方自治体関係者、多くのボランティア、そして原発事故の対応に当たった関係者の献身的な努力に対し、改めて深くねぎらいたく思います。

諸外国からも実に多くの善意が寄せられました。物資や義援金が送られ、また、救援の人々も多数来日し、日本の救援活動を助けてくれました。また駐日外国大使など日本に住んでいる外国人を始め、災害発生後の日本を訪れる多くの外国人が、被災地に赴き、被災者を励ましてくださっていることに感謝しています。

この度の津波災害において、私どもは災害に関し、日頃の避難訓練と津波防災教育がいかに大切であるかを学びました。この教訓を決して忘れることなく、これから育つ世代に伝えていくことが大切だと思います。今後とも施設面の充実と共に、地域における過去の被災の記憶の継承、日頃からの訓練と教育などにより、今後災害の危険から少しでも多くの人々が守られることを期待しています。危険な業務に携わる人々も、この度の経験をいかし、身の安全が確保されることに工夫と訓練を重ねていくよう願っています。

今なお多くの苦難を背負う被災地に思いを寄せるとともに、被災者一人びとりの上に一日も早く安らかな日々の戻ることを一同と共に願い、御霊への追悼の言葉といたします。

◇

安倍総理大臣式辞の要旨

東日本大震災の発生から二年の歳月が経ちました。震災で亡くなられた方々の無念さと、最愛の方を失われた御遺族の深い悲しみを思うと、誠に痛恨の極みで哀惜の念に堪えません。衷心より哀悼の意を捧げます。

今を懸命に生きる人々に、復興を加速することで応えることが、天国で私たちを見守っている犠牲者の御霊に報いるみちでもあるはずです。持てる力の全てを注ぎ、被災者に寄り添いながら、一日も早い被災地の復興、被災者の生活再建を成し遂げるとともに、災害に強い強靭な国づくりを進めていくことを固くお誓いいたします。全国各地、世界各国・各地域からも多くの、温かく、心強い御支援を頂きました。改めて感謝申し上げたいと思います。

我が国の先人たちは、幾多の困難を克服し、その度によりたくましく立ち上がってきました。私たちもそれにならい、手を携え、前を向いて歩んでいくことを誓います。

神風特別攻撃隊第一、第二御楯隊と硫黄島

評議員（陸士61期）　飯田　正能

今年も3月10日（日）、墨田区横網町公園内の東京都慰霊堂では、午前10時から公益財団法人東京都慰霊協会主催による、68年前のこの日の東京大空襲を始めとする都内戦災遭難死者及び関東大震災遭難死者を慰霊する「春季慰霊大法要」がしめやかに執り行われた。

68年前の3月9日夕、サイパン、テニアン、グアム3島の基地を飛び立った334機のB29大編隊は、途中なお死闘の続く硫黄島の砲炎を眼下にしつつ北上して東京上空に達した。

昭和20年2月19日、硫黄島南海岸に押し寄せる米軍上陸部隊

硫黄島は、日本本土の爆撃を狙う米軍にとっても絶対に必要な戦略要地であった。東京から約1250km、サイパン、テニアン、グアム等の米軍戦略爆撃基地から約1100km、東京、名古屋、大阪への、ほぼ中間点に硫黄島があり、しかも小笠原諸島唯一の日本軍飛行基地があった。そこを占領することによって日本本土は米軍戦闘機の行動圏内に入り、その援護によって米軍はマリアナ基地のB29による日本本土の昼間爆撃が可能となったばかりでなく、爆弾搭載量も倍加され、戦果は益々拡大された。また、硫黄島はB29の緊急着陸場となり、更に海上に不時着した搭乗員を救助する艦艇の中継基地ともなり、B29搭乗員の安心と士気の高揚に好結果をもたらした。米軍が硫黄島上陸作戦を開始した2月19日の約2週間後、既に制圧した南部の千鳥飛行場に、B29の最初の1機が緊急着陸してから終戦までに延べ約2400機が同島に不時着し、搭乗員約2万7000名の命が救われたという。米軍は硫黄島制圧直後、未だ地下洞窟陣地を死守し徹底抗戦する日本軍の激しい攻撃の続く中で、中央台地の元山飛行場を中心に滑走路（約2600m）の拡張工事を緊急に実施したという。米軍にとって硫黄島占領はそれだけの重要性があったのである。

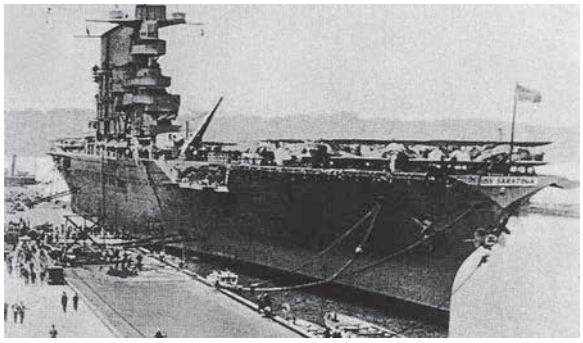
昭和19年7月、サイパン島の陥落以後、米軍は同島始め周辺の島に広大な飛行場を建設して、超空の要塞と言われた超重爆撃機B29の発進基地とし、東京、大阪、名古屋その他の主要都市を始め日本全土の空襲を企図した。

大本営は同年9月、遅くとも10月下旬にはサイパンからの本土空襲が始まるものと予想していたが、陸海軍航空部隊は、フィリピン方面に全力を傾注していた関係もあって、その対策は思わしくなかった。果たして同年11月1日、B291機が関東地方を偵察した。超高空を飛行するB29に、我が防空戦闘機は追い付けず、大本営は、サイパン基地撃滅のほかにB29の空襲を阻止する方策はないと判断した。同月2日夜、海軍中攻隊（九六式陸攻）10機がサイパンとテニアンの飛行場を襲撃した。3日には陸軍の重爆隊（第二独立飛行隊・隊長新海希典少佐）8機（九七重二型9機編隊で浜松飛行場を発進し、途中硫黄島で燃料補給と爆装（夕弾装備）を終え、故障機1機を残して発進した）がサイパンのアスリート飛行場を奇襲して大戦果を挙げた。同月6日にも海軍中攻隊7機によるサイパン、グアム爆撃に続き、新海隊の重爆5機（硫黄島で故障機3機残留）、百式司偵の池田隊4機がサイパンとテニアンの飛行場を奇襲し、相当の戦果を挙げた。更に同月27日午前零時、新海隊3機が3回目のアスリート飛行場奇襲に成功し、大戦果（12機以上撃破、3箇所の大火災を発生させたという）を挙げて全機無事帰還した（新海隊の活躍に対し、防衛総司令官から12月27日感状が授与された。この感状は上聞に達し、昭和20年2月23日には単独拝謁の栄に浴した。なお、第二独立飛行隊長新海希典少佐については、会報『特攻』第79～80号に「陸軍挺進部隊銘々伝⑤・同続・同再続」として掲載済みである）。また、同27日には、海軍の第一御楯隊（隊長大村謙次中尉以下11名）零戦11機が硫黄島を発進し、アスリート飛行場を襲撃して大戦果を挙げ、全員戦死した。同隊は木更津に司令部を置く、第三航空艦隊（司令長官寺岡謹平中将）で編成された特攻隊である。中攻・重爆、更には特攻隊の基地攻撃にも拘わらず、サイパンからのB29による東京空襲を阻止することはできなかった。

米軍は昭和20年2月中旬の硫黄島攻略を企図し、上陸に先立って執拗な空襲と艦砲射撃を行った。また、2月16日には、硫黄島攻略の支援として高速

空母機動部隊が房総半島沖から東京周辺に空襲を実施した。東日本の防空を担当する第三航空艦隊は、全面的な航空戦による反撃で、いたずらに兵力を消耗することを避け、本土上陸に備えて兵力を温存するよう聯合艦隊司令部から指導されていたが、米軍の硫黄島攻略の企図が明確になると、第三航空艦隊司令長官寺岡中将は、硫黄島周辺の米艦隊に対し、精鋭部隊による特攻作戦を決意し、２月17日、指揮下の第六〇一航空隊司令杉山利一大佐に特攻隊の編成を命じた。千葉県香取基地に進出していた六〇一空の搭乗員達の士気は極めて旺盛で、特攻隊員募集が伝えられると直ちに多数の搭乗員がこれに応募し、米軍が硫黄島に上陸した２月19日、神風特別攻撃隊第二御楯隊が編成された。隊長は村川弘大尉（海兵70期）、第一攻撃隊・艦爆「彗星」４機・８名、第二攻撃隊・艦爆「彗星」４機・８名、第三攻撃隊・艦爆「彗星」４機・８名、第四攻撃隊・艦攻「天山」４機・12名、第五攻撃隊・艦攻「天山」４機・12名、直掩隊・戦闘機「零戦」12機・12名、搭乗員総数60名で、艦爆「彗星」は５００kg爆弾を装着し、第四攻撃隊の艦攻「天山」は８００kg爆弾を、第五攻撃隊の艦攻「天山」は魚雷を装備していた。

昭和20年２月21日朝出撃直前に、香取基地で指揮官の訓示を受ける第二御楯隊の隊員達。背後に魚雷を装着した艦上攻撃機「天山」が見える。



第二御楯隊の攻撃で大破し修理中の空母「サラトガ」

第二御楯隊の出撃は、編成翌日の２月20日とされ、八丈島まで進出したが、硫黄島近海の空には密雲が垂れ込め、悪天候のため、香取基地に引き返した。翌２月21日朝、再び香取基地を発進した第二御楯隊は、八丈島で給油を終え、夕刻の突撃を期し、午後順次八丈島を発進して硫黄島に向かった。敵艦への突撃は、戦闘機が空母に着艦した後の、日没前後から暫時の間と決定していた。しかし、小笠原諸島に達した頃早くも米軍機の攻撃を受け、この交戦で天山１機、彗星１機、零戦２機が大破し、父島に不時着した。それより先、八丈島でも天山１機、零戦１機他が故障のため出撃できなくなった。最終的に硫黄島周辺にまで進出できたのは、彗星10機、天山６機、零戦８機であった。

第二御楯隊は硫黄島の北西56kmを航行中の米機動部隊を発見し、17時３分一番機が正規空母「サラトガ」の艦首に体当たりを敢行した。続いて二番機が飛行甲板前部に爆弾を投下した後、海中に突入した。立て続けに六番機まで「サラトガ」に襲いかかり、「サラトガ」は艦首が爆発と同時に猛烈な火災を発生し、格納庫も火の海となった。暫くして再び３機の特攻機が「サラトガ」に襲いかかり、１機の８００kg爆弾が飛行甲板に命中し、甲板を貫通して大爆発を起こした。それでも「サラトガ」は必死の消火活動により、どうにか沈没を免れ、米本国に回航されて修理ドックに入ったが、終戦まで戦場復帰はできなかった。空母「サラトガ」では１２３名が戦死し、１９８名が負傷した。

更に第二御楯隊の最大の戦果は、護衛空母「ビスマルク・シー」を撃沈したことである。19時50分、空も薄暗くなった頃、空母「ビスマルク・シー」の後部昇降機の真横の舷側に１機の特攻機が体当たりをした。昇降機は艦底に落下し、格納庫は大火災を起こした。更に後続機が後部エレベーターの孔を狙って急降下し、そのすぐ前の飛行甲板に突入した。飛行甲板は粉砕し、隔壁も歪曲した。爆薬、ガソリンに引火し、戦闘を終えて収容したばかりの多数の戦闘機も燃え上がり、艦内は大小の爆発と火災が相次いだ。艦長ブラッド大佐が総員退去の命令を発し、艦長自身も退艦した直後に大爆発が起こり、炎に包まれた「ビスマルク・シー」は転覆して海没し、２００名余の乗員が艦と運命を共にした。

そのほか第二御楯隊は、護衛空母

「ルンガ・ポイント」にも1機体当たりをして小破、防潜網輸送艦「キオクク」にも1機命中して小破、付近にいた戦車揚陸船LST477、同LST809の2隻にも損害を与えた。この日の特攻攻撃で出撃した特攻機20機の内16機（彗星10機、天山6機）、38名と直掩機（零戦）12機の内5機、5名が戦死し、父島に帰還したのは零戦3機のみであった。先に特攻進撃中米機と交戦して被弾し、父島に不時着した彗星1機（小林善男上飛曹、川崎直飛長）は、修理を終えて3月1日、ただ1機で父島を飛び立ち、硫黄島周辺の艦船を攻撃して戦死しているから第二御楯隊の硫黄島攻撃による特攻戦死者は45名である。

摺鉢山の山頂にある「第一・第二御楯特別攻撃隊」碑

第二御楯隊の特攻攻撃は、硫黄島の守備隊からも見届けることができた。海上の米艦隊の天を焦がすほどの大火柱を望見して、守備隊将兵は大いに奮い立ったであろう。硫黄島海軍部隊指揮官市丸利之助少将は、六〇一空司令部に宛てて「友軍航空機ノ壮烈ナル特攻ヲ望見スル等ニ依リ、士気益々昂揚必勝ヲ確信敢闘ヲ誓アリ」との電文を発している。もともと硫黄島は海軍の航空基地であった。南の千鳥飛行場、中央台地の元山飛行場と北飛行場の三つの飛行場があった。市丸少将率いる海軍第二七航空戦隊は、米軍の猛爆撃により、中央の元山飛行場にあった約80機の飛行機は既に破壊され、同航空戦隊は、陸戦隊となって栗林兵団に加わっていたのである。

筆者は昨年2月6日から15日まで、政府派遣硫黄島遺骨帰還特別派遣団の一員として、遺骨収容作業に携わったのであるが、その厳しい作業の合間に駐屯地司令の案内で、島南端の摺鉢山（標高170m）の頂上にある三つの慰霊碑に参拝した。向かって右から順に岸信介元総理の筆になる「硫黄島戦没者慰霊顕彰」碑と小泉純一郎元首相の筆になる「慰霊」碑、それに「第一御楯特別攻撃隊」と「第二御楯特別攻撃隊」の碑である。この特攻隊碑の中央にある副碑には、第一御楯特別攻撃隊については、「昭和19年11月27日朝本島を発進して彩雲2機に誘導された零戦12機がサイパン飛行場のB29に対し白昼銃撃を敢行し、米軍の心胆を寒からしめたが、これ即ち第一御楯特別攻撃隊である…」と刻まれているが、同特攻隊による特攻戦死と記録されているのは、大村謙次中尉以下11名である。また、第二御楯特別攻撃隊に関しては、「米軍は昭和20年2月大挙攻略軍を編成して進攻し来たったのである。この敵に対し我が方は第二御楯特別攻撃隊が大戦果を挙げ…第二御楯隊は彗星12機、天山8機、零戦12機より成り、5個の攻撃隊に編成されていた。2月21日香取基地を発ち、八丈島で給油して次々と出撃し、硫黄島周辺の敵艦船群に突入して多大の戦果を挙げた…」と刻まれ、特攻戦死者は村川弘大尉以下35名とあるが、前記のとおり、特攻戦死と記録されているのは村川弘大尉以下45名である。

各碑の側面に刻まれた「海軍中攻隊」「陸軍重爆隊」碑

また、「第一御楯特別攻撃隊」碑の側面には「海軍中攻隊」と、「第二御楯特別攻撃隊」碑の側面には「陸軍重爆隊」と刻まれている。これらの爆撃隊は、前記のとおり、硫黄島で給油してサイパン爆撃に向かった飛行隊で、特攻隊扱いにはなっていないが、未帰還機が少なくなかった。

硫黄島は、活火山島であり、絶えず噴火と隆起活動を続けている。摺鉢山一帯は、火山活動が激しく、崖崩れが生じており、特に御楯特別攻撃隊碑の付近は崖崩れによる倒壊の危険が生じたので、移設したとのことであるが、筆者が遺骨収容作業に参加した際は、カメラや携帯電話の持込みが禁止されており、現状の撮影はできなかったので、確認はしていない。また、その際に最南端にある米軍の戦勝記念碑（当時の太平洋艦隊司令長官ニミッツ元帥の「硫黄島で戦ったアメリカ兵の間では、並みはずれた勇気がごく普通の美徳であった」との有名な顕彰文が刻まれ、星条旗を立てる海兵隊員のレリーフが台座に嵌め込まれている）は、米海兵隊員によって最初に星条旗が立てられた箇所にこだわっているため移設されておらず、崖崩れによる崩壊の危険性があるとのことであった。

帝都防衛の空に散った成増・陸軍飛行第47戦隊の勇士達

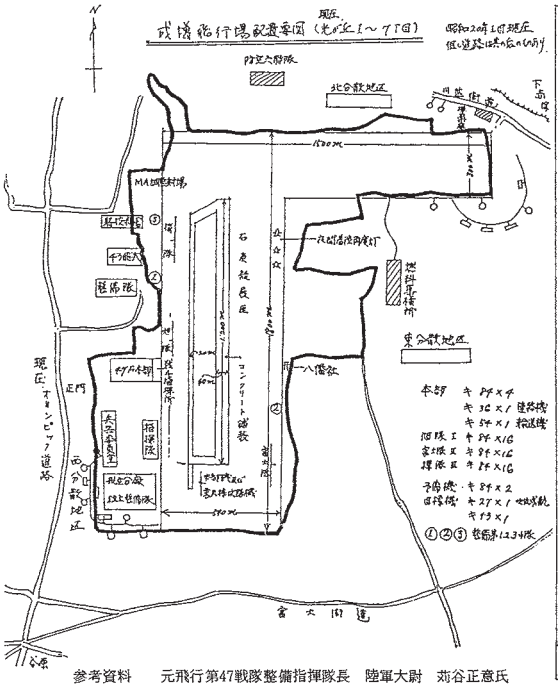
評議員（陸士61期）飯田　正能

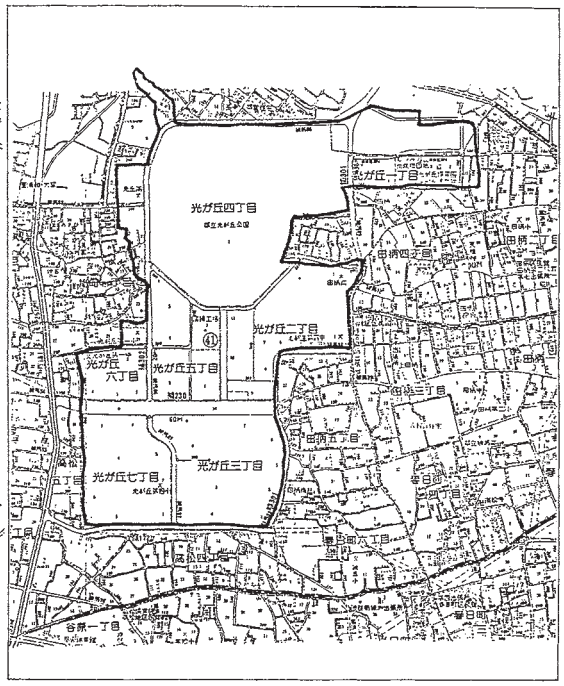
はじめに

筆者は、平成元年8月以来、練馬区光が丘（1～7丁目）にある、光が丘パークタウン内の元公団分譲住宅の一画に居住しているが、この地はかつて帝都防衛の空軍基地・成増陸軍飛行場があった所である。南北約2km東西約1・8km、約100万坪の土地に南北1800m幅540m、東西1500m幅300mの滑走路用地をL字形に設け、コンクリート舗装の1200m主滑走路と800mの補助滑走路を有し、付属設備として本部・中隊兵舎・格納庫・倉庫・掩体壕等を有し、高射砲陣地や探照灯を整備した戦闘機戦隊用の飛行場であった。

この飛行場の西約2kmの台地・振武台（現在の東京都練馬区と埼玉県朝霞市・和光市にまたがる地区、現陸上自衛隊朝霞駐屯地を中心とする地区）には、我らが母校（陸士57期～61期）陸軍予科士官学校の校舎と広大な演習場があった。B29による東京空襲が始まる直前の昭和19年11月1日から沖縄戦の始まる直前の翌20年4月1日の間、3回に分かれて入校した陸士61期生にとって、最も近く、最も関心の深い飛行場であったから、外出許可日を利用しては、個人で、あるいは仲間と一緒に、又は区隊長に引率されて、しばしば見学に訪れたものである。しかし、そこは正に戦場であった。首都防衛に活躍する戦隊員、沖縄戦に出撃する特攻隊員、特攻訓練に励む待機特攻隊員、取り分け我らの先輩である特攻隊長たちとの幾多の出会いと別れがあった。大空に海上に壮絶なる戦闘を演じて散華された先輩たちの思い出は多々あるが、取りあえず、筆者ら同期生が体験した二、三の防空戦隊の勇士たちの活躍と奇縁について記してみたい。

成増陸軍飛行場跡は、戦後、米軍将校用宿舎のキャンプ「グラント・ハイツ」時代を経て昭和48年に返還され、今や東京23区内最大の都立「光が丘公園」（約61万㎡・日比谷公園の約4倍）とそれに隣接する緑豊かな、そして区民センター、警察、消防、病院、小・中・高校等の公共施設を始め、文化、教育、体育、医療、商業等各種施設の整った大公園団地（約120万㎡）に生まれ変わっている。都営・旧公団・都公社の各種賃貸・分譲合わせて約1万3000戸、人口3万数千人の「光が丘パークタウン」である。その光が



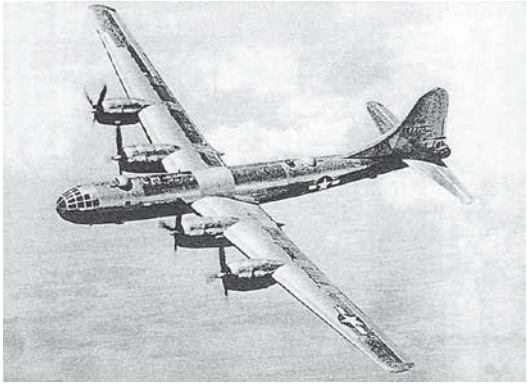


参考資料　元飛行第47戦隊整備指揮隊長　陸軍大尉　苅谷正意氏
元第10飛行師団参謀・陸軍少佐　山本茂男氏
元第1航空軍司令部発行“飛行場記録”防衛庁防衛研究部

主滑走路跡（南半分）の光が丘パークタウンいちよう通り

戦機来襲の報を受け、愛機（二式戦）「鍾馗」に向かって走る邀撃隊員

主滑走路跡脇に建てられた「平和祈念碑」



「超空の要塞」B29爆撃機

丘公園内の練馬区立図書館と同体育館との間、旧主滑走路の中間点脇に、平成7年8月15日、終戦50周年を記念して、「平和祈念碑」が建立され、その除幕式が行われた。そして、その碑文の中にたったの1行ではあるが、「昭和18年この地に「帝都（首都）防衛のため成増陸軍飛行場がつくられ、多くの若い生命が空に散っていった」という一節が刻まれた。この恵まれた緑と太陽の自然に囲まれ、四季折々の花鳥風月を楽しみながらも、決して忘れてはならないのは、勇士たちの遺烈であり、魂の叫びである。

陸軍成増飛行場と飛行第47戦隊

昭和19年7月、サイパン、テニアンなどマリアナ群島を占領した米軍は、サイパンのアスリート飛行場を始めとする戦略爆撃基地を整備し、ここに進出した米陸軍の「超空の要塞」ボーイングB29「スーパーフォートレス」戦略爆撃機が東京を初空襲したのは、昭和19年11月24日であった。

これより先、同年11月1日の真っ昼間、空襲警報が発令され、美しく澄みわたった秋空の東京上空1万メートルの高々度を中央線に沿って西から東へ飛行機雲を引きながらキラキラ光る飛翔体がゆっくりと飛び去ったのを目撃した都民は多かったのではないか。これこそ、マリアナ基地からやって来たB29（F13偵察用爆撃機）1機による第1回の帝都周辺偵察飛行であった。そして、奇しくもその日は我々陸士61期甲生徒（全員中学校出身者の航空要員、なお、陸士61期生は、この後翌20年2月上旬に残りの中学校出身者が、3月末に幼年学校出身者が乙生徒として着校し、4月1日に乙生徒の入校式が挙行された。東久邇宮俊彦王殿下（終戦直後の総理大臣・陸軍大将・東久邇宮稔彦王殿下の二男、現多羅間俊彦氏、ブラジル・サンパウロ市在住）も同日入校し、生徒隊に入隊された。乙生徒は同年7月、半数ずつが地上兵科と航空兵科に分けられた）の入校式当日であった。午前中朝霞・振武台の校庭で入校式を執り行い、入校祝いの昼食を済ませたばかりであった。

当時、帝都防衛の陸軍航空隊は、二式単座戦闘機（キ44「鍾馗（しょうき）」）を主力とする成増基地の飛行第47戦隊と三式戦闘機（キ61「飛燕（ひえん）」）を主力とする調布基地の飛行第244戦隊が中心であった。このうち飛行第47戦隊は、昭和18年10月に編成され、急造の成増飛行場に移駐したが、その前身は、独立飛行第47中隊である。その名称は、赤穂浪士・四十七義士にあやかって命名

されたものと言われ、戦闘機の胴体には、大石内蔵助が吉良邸討入りに際して用いたという山鹿流陣太鼓のマークが画かれていた。昭和17年初め、まだ制式採用決定前（制式採用は同年9月）の、我が国初の重戦闘機（昭和16年7月各務原基地で行われた独空軍の最優秀戦闘機メッサーシュミット119との日独操縦者による各種対抗試験でも、速度その他の点において勝っていると判定された）、新鋭二式単座戦闘機（キ44「鍾馗」）の増加試作機9機をもって、実用審査を兼ね、臨時編成されて（中隊長は、同機の審査主任であった坂川敏雄少佐・陸士43期、隊員には飛行実験部その他から優秀戦闘機操縦者を充当した）、ビルマ方面空戦で活躍した。別名を「空の新撰組」又は「かわせみ部隊」と称された（「かわせみ部隊」というのは、二式単戦が我が国初の重戦闘機として、それまでの97戦・キ27や一式戦・キ43「隼」に代表される旋回性能に重点を置いた軽戦格闘主義から高速一撃離脱戦法へと新しい空中戦法の開花期を迎えて生まれ出た重戦闘機で、速度、上昇力、急降下性能などを重視した反面、旋回性能や航続距離、着陸性能などはある程度犠牲にされ、操縦はかなり難しく、その急降下の様子や急速着陸の姿勢などから、獲物を狙う翡翠（かわせみ）にそっくりとのことで付けられたニックネームである）精鋭戦闘機部隊であった。ところが、早くも反撃を開始した米軍の第一陣として、昭和17年4月18日、米空母ホーネットを発進したドゥリットル指揮下のB25爆撃隊による東京・名古屋ほかの奇襲攻撃を受け、帝都防衛の弱点を衝かれた大本営により、その後間もなく内地帰還を命ぜられ、帝都防衛の任に就いたのである。

ボーイングB29「スーパー・フォートレス」戦略爆撃機は、昭和17年（1942年）9月に完成、初飛行に成功し、早速大量生産を開始して、昭和19年（1944年）6月16日には、日本を初空襲している。全長30・17m、全幅43mという巨大な超空の要塞は、2200馬力のエンジン4基を搭載し、最大速度574km、航続距離5230km、航続時間12時間、上昇高度1万240mを誇った。B29は防御も固く、厚い防弾鋼板で被われ、セルフ・シーリング・タンクというガソリン・タンクの外側をゴムで包み、銃弾で穴が開いてもゴムの力で自然に穴が閉じる構造になっていた。

昭和19年6月16日、中国の成都基地を出撃したB29の編隊が、長駆北九州に飛来した。当時日本最大の製鉄所であった八幡製鉄所を狙ったものであった。この時は第12飛行師団隷下飛行第4戦隊の二式複座戦闘機（キ45改「屠龍（とりゅう）」）が邀撃した。37mm機関砲を背中に背負い、B29の腹の下に潜り込んで撃ち上げる戦法で活躍したが、防御の固いB29は多少の被弾ではなかなか撃ち落とせなかった。その後も断続的に空襲が続いたが、B29の方も、少数機による高々度からの爆撃ではその効果も少なかった。昭和19年8月20日、成都を発進した88機のB29大編隊が八幡製鉄所を空襲したが、この時、B29に対し本土上空における初めての体当たり攻撃が行われた。飛行第4戦隊の野辺重夫軍曹と高木伝蔵兵長が搭乗した二式複座戦闘機「屠龍」である。八幡西方上空にB29の大編隊を発見した野辺機は、僚機と共に邀撃し、37mm機関砲を放ったが命中せず、回避運動に移ったB29に対して反転再攻撃の余裕なく咄嗟に「野辺機、体当たり！」と叫んで突進し、第一梯団長機に激突、B29もろとも巨大な火の渦を捲いて四散した。更に飛び散ったエンジンの黒い塊が梯団長機に続く二番機を直撃、左翼を砕かれた二番機は錐揉み状となって墜落した。果敢にも1機をもって2機撃墜の戦果を上げた。

一方、帝都防空の任を担う第10飛行師団では、昭和19年11月1日を初めとして5日、7日と続けて帝都上空に侵入するB29偵察機F13に対して全力出動したが、追撃できなかった。我が新鋭防空戦闘機（二式単戦「鍾馗」）にしても、三式戦「飛燕」にしても、当時の世界的新鋭機に決して劣るものではなかった。しかも、飛行第47戦隊はその後間もなく決戦機と称せられた優秀機、四式戦キ84「疾風（はやて）」に改編されている。）をもってしても1万mの高々度の邀撃戦は至難な技であった。マリアナから飛来するB29を邀撃するには逸早く情報を収集し、航空戦力を展開する必要がある。航空部隊が出動命令を受けて高度1万mの上空で待機するまでには1時間以上を要した。B29は500km以上の高速で高度を上げながら帝都に来襲するので、八丈島辺りでB29を発見してからでは、十分な防空態勢が取れなかった。第10飛行師団長吉田喜八郎少将は11月7日、隷下各戦隊に対して4機ずつの特別攻撃隊編成を命じた。この時期九州では、前記のように既に体当たり攻撃を行っていたが、特別攻撃隊として編成を組んだのは、本土ではこれが最初であった。B29必墜の策として考えられたのが、飛行機の重量をできるだけ軽くし（そのためには防御鋼板を取り外し、銃砲・

弾薬も少なくし）て敵よりも逸早く高高度に上昇し、体当たりを敢行することであった。ただし艦船への特攻とは違い、体当たり後脱出可能であれば、落下傘降下で生還することになっていた。

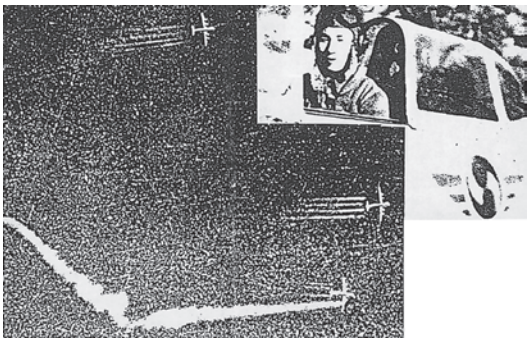
帝都防衛初の体当たり攻撃で見事B29を撃墜した見田義雄伍長

マリアナ諸島からの本格的な空襲は、11月24日から始まった。東京郊外にあった中島飛行機武蔵工場を狙ってB29が大編隊で来襲した。この日東京でも初めて空中特攻が敢行された。成増の飛行第47戦隊の見田義雄伍長（少飛12期）が搭乗する二式単戦「鍾馗」は、銚子上空まで追撃して体当たり攻撃を敢行し、見事B29を撃墜し、自らも壮烈な戦死を遂げ、東京上空体当たり第一号となった。この日第10飛行師団が撃墜したB29は、見田伍長の体当たり攻撃によるものを含めて2機であったが、未帰還機も6機を数えた。吉田第10飛行師団長は、戦力の増強が望めない状況下では体当たりが唯一有効な手段であるとして、各戦隊に特攻機の倍増、即ち8機ずつの編成を命じた。西部軍管区の第12飛行師団でも特攻隊が編成された。これらの特攻隊は、後に（12月5日）防衛総軍司令官東久邇宮稔彦大将により、帝都防衛の第10飛行師団所属戦隊を「震天隊（通常、震天制空隊と呼ばれた）」と、西部軍所属戦隊を「回天隊」と命名された。

次いで12月27日、B29の数梯団が大月、八王子方面より帝都に侵入し、各所を爆撃した。第10飛行師団所属各戦隊は奮戦し、撃墜確実5機、同不確実5機、撃破25機の戦果を上げた。

都民注視の中で壮絶な体当たりを敢行した幸満寿美軍曹

明けて昭和20年1月9日、B29は3梯団で各方面より帝都に侵入した。各飛行隊は果敢に追撃し、体当たりによる撃墜6機を含む11機のB29を撃墜する大戦果を上げた。そのうち成増の飛行第47戦隊は、B29撃墜5機、撃破3機の戦果を上げたが、第2震天制空隊の超ベテラン操縦者2名を体当たり攻撃で失った。粟村尊准尉と幸満寿美軍曹である。いずれも徴兵後下士官操縦者として熊谷陸軍飛行学校戦闘機班を卒業した優秀な操縦者であるが、この日二式単戦「鍾馗」を駆ってB29を追撃し、体当たりで見事これを仕留めたのである。うち、幸軍曹の場合は、B29の編隊を邀撃、成増飛行場上空で、衆人環視の中、その1機に壮絶な体当たりを敢行し、機体もろとも四散したが、左外エンジンを吹き飛ばされたB29も煙を吐きつつ脱落し、真崎編隊によって止めを刺された。このB29のエンジンは、豊島区椎名町に落下した。そして、その体当たりの瞬間は、居合わせた朝日新聞の報道写真班員によって撮影された。目撃した第47戦隊の整備指揮隊長苅谷正意大尉（少飛1期・少候22期・陸士55期相当）は、手記の中で「『雷光！（戦闘指揮所）こちら幸軍曹、只今より体当たり！』突然戦闘指揮所の対空2号のスピーカーが怒鳴る。走り出て見上げると、1万メートルの大空に、紅蓮の火球と化して落下する幸軍曹機、白い煙を引きながら11機の大編隊から遅れゆく1機のB29爆撃機の姿が目に飛び込んだ。全都民の頭上に展開された大スペクタクル。その幸軍曹と私は、さっきまでピストで冗談を交えながら話していたばかりだ。彼の乗機は、1万メートル以上の行動のため、40ミリ、13ミリ各2門の砲と13ミリ厚さの防弾鋼板をおろし、吸入酸素瓶も軽量の酸素発生剤に替え、合わせて200キロ以上も軽くした体当たり専門の特攻機だ。せめても華やかな『死出の装束』をと、カウリングから胴体に流れる派手な真紅のラインで彩色した『鍾馗』を万歳で送り出した整備員たちも皆、この壮烈な『神』の姿に両手を合わせて、涙にむせんだ」と記述しておられる。



成増飛行場上空で壮絶な体当たりを敢行四散した幸軍曹機とB29。右は出撃直前の愛機上の幸軍曹。胴体には山鹿流陣太鼓のマークが見える。

戦隊の至宝粟村尊准尉の体当たり

粟村准尉（戦死後中尉）のことについては、後掲の資料・読売新聞宮本特派員の連載記事「邀撃戦記」粟村准尉①～④に詳しいので、多くは記述しないが、兎に角これ程の研究熱心で、並み外れた操縦と射撃の技術、加えて旺盛な闘志を持った戦闘機操縦者は他に例がないとされ、隊員からは操縦の名人、射撃の神様と言われ、戦隊長から

も戦隊の至宝、日本の空の至宝と称えられた。しかも粟村准尉は生粋の戦闘機操縦者ではない。徴兵による入隊後、航空に転じて整備兵となり、後下士官操縦者として熊谷陸軍飛行学校の戦闘機班を首席で卒業した銀時計組である。操縦技術に長け、整備にも明るいということは、戦闘機操縦者として鬼に金棒であった。その優れた操縦技術を見込まれて、一式戦・キ43「隼」のテストパイロットを務め、その優れた操縦技術に対し航空総監賞を授与されたこともあった。独学で高等数学を勉強し、空中射撃については、特に造詣が深く、実技の名手であるとともに理論家であり、後に記述する「空中射撃計算盤」の発明者でもあった。

成増飛行場で61期生に説明される粟村准尉。この1週間後B29に体当たり戦死。

昭和20年1月9日、田無の上空で8機のB29編隊を捕捉、銚子上空まで追撃し、うち1機の尾砲射手を射殺した後、尾翼水平安定板をプロペラで薙って破壊した。尾翼を破壊されたB29は忽ち錐揉み状態となって落下し、空中分解を起こして海中に墜落した。粟村機も落下の途中座席の辺りで真っ二つに裂けたが、その直前高度7000m付近で飛び出した落下傘が開いた。しかし、強い偏西風に煽られて沖へ流され、遂に海中に没した、という。

筆者はかつて、平成8年7月から同9年4月の間、（公財）偕行社の機関誌『偕行』に、7回にわたり「嗚呼！成増陸軍飛行場」と題する記事を連載したことがある。その第1回の記事の紙面に、成増飛行場を訪れた陸士61期生（甲生徒）に説明中の粟村准尉の遺影を掲載した。昭和20年1月9日銚子上空でB29に体当たりを敢行して撃墜し、散華される1週間前の写真で、前記の元飛行第47戦隊整備指揮隊長の苅谷氏から頂いたものである。苅谷氏もまた、少年飛行兵1期の銀時計組であり、後に少尉候補生22期として航空士官学校を卒業し、航空技研審査部にも勤務したことがあり、飛行第47戦隊では整備要領をシステム化し、部品交換なども定期的に行った結果、故障が少なく、予備機を含めて常時90％に近い実働率を誇ったという。

因みに、飛行第47戦隊は、成増飛行場に移駐時、54機の二式単戦（うち40ミリ砲2門、13ミリ砲2門のⅡ型丙が5機、他は13ミリ砲4門のⅡ型乙）を保有し、17年以来の猛訓練で、練度は相当高く、発令後戦隊全機の離陸完了まで3分15秒の記録を持ち、一方、約200名の整備隊も試作1号機以来のベテラン揃いであった。この当時の人員は、本部に約80名、整備隊に約200名、飛行場大隊約300名、独立整備隊約50名、総勢約650名の各練達の将兵で編成されていた。昭和19年10月に着任した奥田暢戦隊長は、士気を高めるため、飛行隊を三つに区分し、各中隊にそれぞれ旭隊、桜隊、富士隊と命名した。粟村准尉は富士隊に所属していた。

なお、飛行第47戦隊は、昭和20年1月、逐次決戦用新鋭機、四式戦・キ84「疾風」に機種改編されたが、引き続き帝都防衛の任に当たり、1月27日には、震天制空隊の鈴木精曹長が東京上空で、2月10日には吉澤平吉中尉（陸士56期）が太田上空で、それぞれB29に体当たり撃墜、壮烈な戦死を遂げている。

次いで、米軍は硫黄島攻略のため、関東地区の陸海軍飛行場を中心に激しい攻撃を仕掛けてきた。2月16日、機動部隊の艦載機群約千機が七波に分かれて大挙来襲し、中島飛行機太田工場や陸海軍の各地飛行場を終日攻撃した。これに対して、吉田師団長指揮下の第10師団所属各戦隊は反復出撃し、果敢な邀撃戦を行い、多大の戦果を上げたが、我が方も37機の自爆未帰還機を出した。この日の夕刻、防衛総司令官は、第10飛行師団中最も戦力の充実していた第47戦隊と第244戦隊を第6航空軍司令官（菅原道大中将）の指揮下に入れ、邀撃の制限を行った。敵小型機に対し、我が方が敢然と邀撃を行えば、航空戦力は忽ち枯渇し、本土決戦に重大な支障を生ずることが明らかであるからである。2月17日、第30戦闘飛行集団の指揮下に入り、大阪の佐野飛行場に展開し、次いで3月、第6航空軍司令部は九州（福岡）に前進し、同軍隷下の第30戦闘飛行集団は防衛司令官直属として、関東地方に来攻する敵機動部隊の攻撃を命ぜられた。四式戦に改編し、成増にあった飛行第47戦隊は、3月10日、同飛行集団の指揮下に入り、更に5月27日、戦隊は天号作戦参加のため第百飛行師団の指揮下に入り、都城西飛行場（宮崎）を基

地とし、主として特攻機の出撃掩護を行った。戦力は四式戦31機であった。7月8日、第12飛行師団長隷下に編入され、小月飛行場（山口）に移動し、北九州防空の任に当たった。当時四式戦22機の戦力を保持していた。以後数次の空戦で8名の戦死者を出したが、8月15日、小月で終戦を迎えた。

粟村准尉の発明になる「空中射撃計算盤」

粟村准尉が発明したという「空中射撃計算盤」については、その写真を見たことはあったが、陸軍の戦闘機操縦者養成の中核であった明野飛行学校出身者やその関係者の集まりである首都圏明野会（当会会報『特攻』第89号「特攻インタビュー（第6回）」に御登場願った元第194振武特攻隊長・陸士57期中尉の堀山久生氏が永年事務局長として会の運営に当たって来られた）でもその存在は定かではなく、元ベテランパイロットでも現物を見た方はいなかった。ところが、平成23年10月3日、成増会（飛行第47戦隊と成増陸軍飛行場関係者の集まり、苅谷元大尉は永年その中核となって会の運営と戦没者の慰霊顕彰に尽力された）の慰霊祭（靖國神社）の当日、故苅谷氏の御長女の田淵麗（たぶちうらら）さんが、先年亡くなられた父上の遺品の中から発見されたという「空中射撃計算盤」の現物を持参され、靖國神社遊就館その他然るべき所に納められたいとのことであった。

その後、堀山氏のお骨折りで関係者が集まり色々と検討、協議を重ねた結果、遊就館での常設展示は無理ということで、一昨年末、航空自衛隊入間基地（旧陸軍航空士官学校・修武台）内の改築されたばかりの「修武記念館」に納められ、旧陸軍航空関係資料として常設展示されることになった。その詳しい経緯その他検討・検証の結果については、いずれまた記述する機会もあろうかと思うが、筆者は、昨平成24年6月28日、同期生と共に入間基地を訪れ、「修武記念館」で、その現物が展示されていることを確認した。

◇

粟村准尉の発明になる「空中射撃計算盤」

その粟村尊准尉の人柄、活躍ぶりについて、当時防空戦隊基地（成増）に派遣されていた読売新聞の宮本特派員の連載記事（「邀撃戦記」粟村准尉①～④）のコピーが入手できたので、次に掲載させていただいた（なお、当時の古い新聞の切り抜きで、活字の不明瞭な部分もあり、旧漢字（本漢字）、旧仮名遣いであるため読み難いので、漢字は常用漢字に、仮名遣いは現代仮名遣いに改めさせていただいた）。

◇

「機影追う可憐の瞳　噫・愛犬の出迎え空し」粟村准尉①

トン公は柴犬の雑種だった。茶褐色の毛並みが陽に当たると金色に光る。とがった耳、まん丸い目、今年八歳の雌で、半年ほど前に生んだ太郎と花子という犬も、この同じ飛行基地にいるが、なぜかこの子犬たちと仲が悪く、特にこの頃はウー、ウーといってそばへも寄せつけない。

飛行場のピストの前に一脚のベンチを据え、古い操縦士が一人、後輩たちの薄暮飛行の離着陸をじっと見守っている。薄暮飛行から夜間飛行へ、夜間飛行から夜間の雲層突破へ、学鷲や少年飛行兵出身者を短期間に古い操縦者の水準に引っ張り上げる猛訓練が、B29の完墜を目指し、こうして夜となく昼となく不断に続けられている。

そのベンチの傍らに動くものがあるので、そばへ寄ってみるとトン公だった。爆音が近づき、低い空に機影が現れると、トン公もベンチの人と一緒に暗くなった滑走路へ前照灯の光を落として静かに滑り込んでくる車輪を、それが止まるまでずーっと眼で追ってゆく。「おいトン公、お前の主人はもう帰ってこないんだよ、さあ早くピストへ入っておれ」と、ベンチの大尉が頭を撫でてやっても、トン公はまた次の爆音の近づく空の方へ首を上げ、なかなか動き出しそうな気色もない。

初めて記者がこの基地を訪れた日、ピストの中から一番先にころげ出してきて、キャンキャン吠えついたのがこのトン公だった。うるさい野良犬奴と思ったが、ピストへ入ってみると、これがトン公、トン公、おいトン公と、みんなから引っ張りだこで可愛がられていて、その愛撫の仕方に、何か普通以上のものがあることを感じた。

一人の若い少尉が自分の牛乳を飲み残し、同じ食器でペチャペチャとトン公になめさせたのにはびっくりした。「こうしないと、こいつは飲まないのです。食器を別にすると見向きもしない」とその少尉が説明した。

「粟村のしつけだよ、粟村はそのトン公を自分の寝台へ入れたり、ペロペロ鼻をなめてやったりした。箸で取ってやらないと、肉にも目もくれないという奴だ」とストーブのそばでS隊長が言った。それを聞いて、記者はああそうだったのかと思い当たった。このトン公は粟村准尉の愛犬だったのである。

粟村尊准尉がどんなに優秀な戦闘機乗りであったかは一部既に報道され、この基地の部隊長も、粟村は我が隊の至宝であったばかりでなく、日本の空の至宝であったと言っている。

千葉県下神代村の泥田に、あの醜翼をさらしたB29へ最初の有効な一撃をかけたのが粟村准尉である。去る九日（注・昭和20年1月9日）銚子の上空でB29の後方三百メートルに迫り、尾部砲座の射手を撃ち殺し、その上にダッと翻りついて空中分解させた粟村准尉の猛撃は、国民の記憶に焼き付いている。その時七千メートルの上空で落下する愛機から放り出され、落下傘は開いたが、強い西風に煽られて、無念、准尉の体は追いかける友軍機の眼前で鹿島灘の沖深く吸い込まれてしまった。

その頃トン公は、飛行場の芝生の上を夢中になって転げ回っていた。暫くするとトン公は滑走路の向こうの端の飛行機の停止線付近にずっと座り込んだ。戦闘が終わって一機、二機と飛行機が帰りはじめた。プロペラが止まって、空中滑走で入ってくる飛行機が見える。被弾かガソリンの欠乏か、ひやっとするような低空で逆の方角から不時着で突っ込んでくるのもいた。今の今までB29と渡り合ってきた烈しい息づかいが、色が、どの飛行機にも一目で胸の痛くなるほどはっきりとにじんでいて、着陸の始まった邀撃直後の基地は、凄まじい空気に引っかき廻される。その翼の下をかいくぐり、トン公は西へ東へ走り廻った。飛行機の止まるのももどかしそうに、まだプロペラの唸っている機体へ走り寄り、首を伸ばしては機上の人をじっと見上げる。しかし何度同じことを繰り返しても主人の姿はついに最後まで発見できなかった。トン公はその夜とうとうピストへ入らず、ピストの前の小高いベンチに上がって、一晩中大きな星の光る空を仰いでいた。何をやっても食べようとしなかった。あくる日も、着陸する飛行機さえあれば、ベンチからびゅーっと飛び出していった。そういうことが三日三晩続いた。

粟村准尉がこのトン公を飼いはじめたのは、ここの基地へ移る前からだったというから、もう四、五年になる。粟村准尉が地上にいる時はいつもトン公がそばにいた。准尉ののっそりした大きな足取りとトン公の敏捷な駆け足がよく似合った。准尉の離陸する時には、必ずトン公がその尾翼の辺りで排気に吹かれながら見送った。ある時、准尉が「来い」と一言座席から呼んだばかりに、トン公は飛行機の尾翼の上にぽんと飛び上がり、もう走り出している機体の丸い胴の上を必死になって伝わり、もう一息で座席に辿りつこうとした一瞬、ぱっと振り落とされたこともあるという。

どんなにたくさんの飛行機が降りてきても、その中から一度で粟村機を探しだした。粟村准尉がほかの人の飛行機に乗っていてもこれは決して間違えなかった。

誰かがハーモニカを吹いた。トン公は喉をふるわせてその音の高低に和して吠える。粟村准尉の弾くマンドリンに合わせてよくこういう声で鳴いたのをみんなは思いだす。

大本営から未帰還と発表された粟村准尉の最期は、数日前ついに部隊長によって戦死と確認された。准尉と同県（広島）のS少尉が「お前の主人は凄い手柄を立てて戦死された。もうあきらめろ。今日からは俺がお前の主人だ」と言い聞かせると、トン公はやっと普通に物を食べるようになったが、それでも爆音が聞こえると、今でもすぐにピストの前のベンチに駆け上がる。トン公もあの日「来い」と呼ばれて空へ上り、主人の粟村准尉と一緒に憎いB29に体当たりできたらどんなに幸福だったろう。（つづく）

ハーモニカの伴奏で獨唱？するトン公

「光芒にのたうつB29　夜空の一騎打ち　無念長蛇を逸す」粟村准尉②

帝都住民に対する意識的な、劣悪な無差別爆撃に手をつけた敵がこの次に狙うところは、夜間の編隊による本格的な本土来襲であると思わなければな

らない。B29の性能や、現在の敵基地の状況では、それはもちろん非常な困難な作戦である。しかし廿七日の帝都邀撃戦におけるように、我が制空部隊の撃墜戦果が来襲機の過半に達するという段階になると、敵はどうしても昼間を避け、損害の少ない夜間空襲に一部転ぜざるを得まい。

戦闘機を伴わない遠距離爆撃は一般に夜間を選ぶのが常道であるが、マリアナ基地と本土の間にある遠大な空間と、夜間の高々度でまだ編隊の組みにくいB29の性能度が、現在それを許さないのである。しかもルソン島決戦の戦略的な問題や、過去二ケ月に亘った本土邀撃戦の経過からみて敵はそろそろこの無理で効果の少ない夜間来襲も敢えてせざるを得ない情勢に立ち至っているのではないかと考えられる。

夜間飛び込んできて、一機か二機でさっと盲爆して逃げるB29はなぜ墜せないのだろう、と思う人が多い。昼間偵察に来る敵の一機や二機を、なぜ我が邀撃機は寄ってたかって叩き墜さないのだろうという疑問を持っている人も多かろう。これはまだ高々度の空中戦の実相が国民の間に徹底していないからだ。我が戦闘機は、そういう敵少数機とも立派に戦い、既にその相当数を撃摧している。夜間であったり、敵が単機であったりするから戦果が目立たないのであって、専門家の意見では恐らくあの半数が基地へ帰っていないだろうという。

しかし、敵の小目標が特に夜間において、我が邀撃機にとっても確かにやりにくい相手であることは言うまでもない。B29の性能が、巡航速度五百キロ、上昇限度一万二千メートルというとき、マリアナ基地へ来ているどのB29も皆それだけの能力があると思ったら大変な間違いである。常時それだけの力が出せるのは、恐らく百機に対して五、六機もあるまい。往復五千キロに近い洋上をぎりぎり一杯に飛び、更に我が上空で極限をつく無理な高々度を取らざるを得ない敵にとって、この事情は想像以上に切実であろう。

その僅かな調子の良い飛行機から銃装備をはずし、搭乗員を減らし、辛うじて少量の爆弾や焼夷弾を持ってくるのが一機か二機のいわゆる敵少数機である。したがってこのB29は、編隊の時に比べて一千メートルも二千メートルも高いところを、速度もずっと上げてすっとぶことができるわけだ。素質の良い敵操縦士がこいつに乗り、雲を霞と本土上空をかすめ去る時は、我々にとっても癪にさわるが、敵にとってはもっともっと苦しい、辛いところなのである。

我が制空基地の優秀な戦闘機乗りは、夜間来襲する敵単機に対して必死の研究と必墜の腕を磨いている。編隊なら恐るるに足りないが、B29単機に対する一騎打ちはこの人たちにとってむしろたまらない魅力にすらなっている。既に幾度か手応えのある損害は与えているけれども、本土の夜の大空であの小癪な敵機を火達磨にさせてやりたい烈しい念願である。

粟村尊准尉は、そういう優秀な戦闘機操縦者の一人であった。粟村准尉が最期の日まで口にしていたのは、「夜くる奴を完全に墜したい」という言葉であった。夜の情報が入ると、待ち構えていたように、がばっと跳ね起きた。そして今夜こそものにしたい、と呟きながら一番先に飛び上がって行った。

在りし日の粟村准尉（吉田特派員撮影）

旧臘三十日夜、帝都の東北部を盲爆した敵機が我が照空灯にがっちり捉えられたのを記者は地上で手に汗を握って見ていた。照空灯の光芒を振り放ち、死に物狂いで逃げ出そうと、右に左に二、三度ガクリガクリ大きくよろめいたB29を、恐らく多数の都民はまだ覚えているに違いない。あの時、あの光芒のわきに、よろめくB29のそばに、粟村准尉機がぴたり忍び寄っていたのである。一万メートル以上の高々度であるから、たとえ粟村機が照空灯の光芒の中に入っても肉眼ではなかなか見えないし、爆音もはっきり聞き取りにくい。夜間の高々度戦闘の困難なことは別の機会にまとめてかけると思うが、重装備をほどこした重馬力戦闘機が、夜間一万メートル以上の高々度をとること自体、既に我が優秀な世界的戦闘機をもってしてなお想像を超える手練を要するのである。

粟村准尉はこの時一万メートル以上の敵に対し、更に十分な高度差をもって我らの眼の届かない天外からあの光芒の中のB29に挑みかかっていた。照空灯に輝くB29の銀翼がいま眼の先にある。夢にまで追いかけたこの夜間の敵機だ。苦心に苦心を嘗めて遂に今宵我が掌中に入れた天与の獲物であった。十分な高度差を利して、これに右

後側上方から襲いかかろうとした。照空灯にまつわりつかれ、高射砲弾に追いまくられていた敵は、粟村機がすぐそばへ肉薄するまで気が付かなかったらしい。気が付いた時は、粟村機の機首がぴたりと自分の胴体に擬せられた瞬間であった。矢庭に敵は体をかわした。ぐらりと翼を傾けてよろめいたのはこの時である。そして無茶苦茶に火蓋を切った。しかし、ああどうしたのだろう。粟村機は有利な態勢にあって一発も撃ちかけない。敵の急旋回で照準が発動機のあたりから胴体の中ほどまで滑ったのだ。この姿勢で胴体を狙って撃ったのでは、敵とこちらの速度があるから修正量が取りきれず、射撃しても弾は敵尾部の後方に流れてしまうのである。一発の弾も無駄にはしない日本の射撃の真髄がここにある。そしてこれは、機に臨んで冷静沈着な判断を失わない優秀な日本の戦闘機乗りの誇りであった。粟村准尉は直ちに旋回して第二撃の姿勢を取ろうとした。すると敵機は、再びガクリと体をかわし、スポッと我が照空灯を外したかと思うと、折から渦巻き来たった厚い巻層雲の真っ只中へ姿を没し去ったのである。

こうなるともう一メートル先も見えない真の闇であった。船橋の上空、粟村尊准尉は我が邀撃戦に貴重な一頁を残すべき好機を戦い取りつつ、天運時に利非ず際どいところで流星光底長蛇を逸した。気が付くと愛機は被弾していた。傷付いた愛機を計器に認めながらなおこれを駆って断念せず、雲の彼方に逃れ去る敵機をあくまで急追して行った。（つづく）

「愛機を護る殉忠魂　降下肯ぜず夜間の強硬着陸」粟村准尉③

愛犬トン公を抱いた粟村准尉の写真が、この基地の部隊長の部屋に掛けてあった。部隊長O少佐はそれを仰いで「実に惜しいことをした。あの夜間戦闘で粟村准尉が確実にB29を屠っていたら、彼の戦死した今、この遺影を見てもこれほど悔やまなくてすんだかもしれぬ。しかし傷付いた飛行機で最後まで敵を急追し、遂に不時着するに至ったあの時の粟村の凄い闘志と責任感にはただ頭が下がる。粟村准尉は後進に対してかくも立派な手本を残している。いたずらに嘆くのは彼の心に背くものかもしれない」と言った。

旧臘三十日の夜間邀撃戦で、船橋の上空に敵機を捕捉しながら、武運拙く一瞬にこれを逸し去った粟村准尉は、自機の被弾をかえりみず、あくまで烈しい急追を続行した。猛虎の鼻先で立ちすくんだような好餌が准尉の眼底に痛いほど焼き付いている。求めに求めてここまで追い込めた敵を逃したくなかった。しかし高々度の巻雲を突っ切る計器飛行の中で、発動機の調子が見る見る落ちてくるのがわかった。高性能の飛行機をぎりぎりに使っていたので、ひとたび調子が狂うと悪くなるのも早かった。追跡を断念し今は帰還の途につくよりほかはない。重い機首をめぐらして基地に向かう途中、果たしてこのまま基地まで帰り着けるかどうかも難しい状態となった。

無線でさっきからこの状況を刻々とらえていた地上のO少佐は、粟村機が帝都の上空にかかったと思われる頃、最早これ以上飛行を続けさせることは無理と判断し、直ちに落下傘で降下せよ、と言い送った。新鋭重馬力戦闘機で若し不時着などしては、その時の状況にもよるが、まず昼間でも十人のうち九人までは助からないとみなければならない。部隊きっての名操縦士、我が陸の荒鷲の至宝とまで言われる粟村准尉を死なせたくない。粟村機のプロペラはもうとうの前に止まっている。

部隊長O少佐は気が気でなかった。「落下傘で飛び降りろ」繰り返しO少佐は無線の送話口で怒鳴った。暫くして機上から落ち着いた応答の声が聞こえた。それは「着陸する。飛行場の照明設備を頼む」と。あくまで冷静ないつもの声であった。神技の空中滑走で基地付近まで辿り着いた粟村機は、そこまで来るとさすがにもう力尽きていた。高々度の激闘の後、深夜でしかも飛行機は重傷を負っている。O少佐を始め、地上の人たちが手に汗を握る前で、飛行場の東方八百メートルの麦畑の中に遂に不時着したのである。飛行場の周囲に空しく赤い場周灯だけが点々と寒そうに瞬いていた。

不時着の衝撃で一瞬失神した粟村准尉は、駆け付けた地上員や戦友に救出され、ほとんど奇跡的に生還した。無口な准尉は何も語らなかったけれども、この落下傘降下をどうしても肯んじなかった。燃えるような兵器愛護の精神を何に例えよう、ただ・・陛下の飛行機を失ってはならない、そしてまた・・陛下のおわす帝都の、その都民たちに迷惑を掛けたくない、という一念であった。

この比類を絶する我が荒鷲の忠誠心と責任感は、そのまま飛行機を作る産業戦士の、そして一億国民全部の戦意に通じなくてはなるまい。一万メートルの高々度における、世界でもまだ類の少ない夜間戦闘の直後、しかも古い戦闘機乗りの誇りに掛けた天与の獲

物、男一匹を捨ててかかった夜間の敵B29、それをむざむざ撃墜の寸前に逸して後なお挫けないこの闘志こそ、敵アメリカを最後に撃ち砕く真実の闘魂というものであろう。

准尉の愛犬トン公の遊んでいるピストの壁に、いろいろなものが貼り付けてある。部隊長訓示、部隊要望事項、部隊長統率方針、B29推定図、敵機一覧表、雲形図、照準や発動機の図解など、これらがたいてい粟村准尉の描いたものであった。ピストの入口の「○○隊ピスト」という看板も准尉の筆跡である。ロッカーの上の天井にへばりついている吊り上げ式黒板は、前に窓のところにあったのを、それではピストの中が暗くて困るというので、准尉の工夫で今のところに移し、吊り上げ式にして用のないときは天井に吊り上げておく仕組みになっている。

地上の粟村准尉は、いつも必ず何か考えてやっていた。飛行機が翼を休める掩体の前がぬかると、准尉は整備兵の先に立って、溝を掘ったり、砂利を入れたりして、立派な土木工事をやった。井戸が壊れると、自分でシャベルを振るって井戸掘りやポンプの修繕をした。吊り上げ式黒板の脇に貼ってある「環形照準、目測照準、見エ方（目標の）」と書いた、複雑な曲線の縦横に走っているグラフも、後進のためにそれを作った准尉が、我が第一級の空中射撃の名手たると同時にその理論家であったことを物語っている。それよりも、准尉の発明した「空中射撃計算板」は、正式に航空本部に採用され、既に大量生産の工程に移っていた。准尉はそれが出来てくるのを何よりも楽しみにしていたが、あの夜間戦闘の際、好餌B29を眼前に睨み付けながら遂に終わりまで一発も放たなかった准尉の射撃というものがここに至って初めて良く解るのである。射撃の名手粟村の名は、この「空中射撃計算板」と共に我が空軍史に永く刻み込まれるだろう。そして今、記者の心を一番強く衝くのは、粟村准尉の火の如き忠誠心と闘魂が、現在の日本の水準を遥かに抜く科学によって武装されていたという動かし得ない一点であった。（つづく）

「壁に一つ裟婆ッ気　最後を飾る体当り神技」粟村准尉④

犬の好きな粟村准尉は、また子供が大好きだった。准尉の下宿していた頃は、いつも近所の子供が大勢集まって、一緒に電気モーターの模型飛行機を作ったりした。そこへはすぐ近くにある高等学校の学生たちもよく飛行機の話を聞きに来て、微分や積分を使ってプロペラのピッチとか、高々度におけるその効率とかいうことをいつも話題にしていた。広島のキリスト教系の中学を出て東京のある大学専門部の経済を中退した粟村准尉は、専門的な理科の教育はほとんど受けていないのに、数学が天才的に得意で、どんな程度の高いものでも自由に駆使した。

准尉は整備兵の出身だった。普通の兵隊で入って整備兵となり、戦闘機操縦者に変わったという荒鷲の中でも類の少ない経歴を持っていた。准尉の科学と数学は、主として整備兵の時に、敵と向かい合いながら飛行機の翼と翅と機器と発動機と装備の中から直接に、自力で学び取られたものである。操縦者が整備もできるのは鬼に金棒だ。整備兵と一緒に自分で整備する准尉の飛行機は、事実、ひと度空へ上がると、誰のよりも高い高度が取れるのであった。飛行機が高性能となり、その操作が複雑さを加え、戦場も亜成層圏から更に成層圏をつくという時代になると、操縦者の科学に関する素質が極めて鋭敏に、いよいよ厳しく勝敗の上に現れてくる。言わば粟村准尉は、この新しい戦いの時代の先駆者、高々度空中戦の開拓者の少なくとも一人であった。准尉が「空中射撃計算板」を発明した射撃の名手であった以上に、操縦においては皇軍の至宝とまで言われたこともあえて不思議ではない。この基地へ配属される前は軍の試験飛行家として隼戦闘機などの審査に当たり、その神技の操縦技術に対して、かつて航空総監賞が授与されたのもあえて異とするに足りない。粟村ならばB29でも一人で操縦するだろうと言われたほど、どんな型でも准尉の手にかかって乗りこなせない飛行機はなかったのである。

粟村准尉が戦死したのは、去る一月九日の邀撃戦であった。それは粟村准尉の最期を飾るに相応しい壮烈極まりない体当たりであった。この最期の模様は、幸いなことに、准尉と同じ基地で起居を共にしていたS曹長によって、これ以上はっきり現認できることは滅多にあるまいと思われる三、四百メートルの近距離の空でつぶさに見届けられたのである。そのS曹長も、記者に粟村准尉の体当たりを話してくれた翌廿七日、B29の機関砲もろとも落下するという痛烈な体当たりを敢行、日頃尊敬していた准尉の後を追って戦死を遂げた。

青いペンキで塗ったB29の大きな模型を左手に持ち、白いペンキで塗った我が新鋭機の模型を右手に持ち、双方の位置や方向や角度の関係を細かに示

しつつ、粟村機の体当たりを眼に見えるように説明してくれたS曹長、その曹長も今はない。小さい模型で、大きな模型の尾部をこつこつたたいて体当たりの最期の瞬間を語ったあの時の曹長の様子が、今も記者の眼底に滲み透っている。俺もすぐこうしてぶつかってみせるぞとS曹長はあの時我とわが心に言い聞かせていたのかもしれない。そう思うと、昨日会い、夕べ語り合ったばかりの荒鷲が今日訪れるピストからは姿を消しているというこの戦いの烈しさに、そして記者の今の仕事の重さにただ眼も眩む思いである。S曹長の思い出も込めて。曹長の語った粟村准尉の最期を伝えよう。

「東京の上空から敵の最後の八機編隊を友軍機五、六機で追撃していた。ほとんど向こうと同高度です。敵の左後方、友軍機の先頭に粟村准尉殿がおられました。そのままの姿勢で銚子の上にかかった。敵の尾部がはっきり見える。そこで前に出た自分は速度をつけて攻撃を掛けようとすると、その時、後ろのやや上の方から、この辺です。浅い後上方ですね、ぐんぐん距離を詰めて現れた友軍機一機、それが粟村機でした。敵の尾部砲は撃っていない、准尉殿も撃っていません。准尉殿が敵の尾部砲手を射殺したものと推定されました。言い遅れたが、これは敵編隊のしんがりの一機です。速度は若干こちらが勝っていたようです。しかし双方の速度差はほとんどないといってもよいくらいだったので、この准尉殿の飛行機は極めて静かに自分がそばであっけにとられたほど静かに近寄り、あっと言う間にこのB29の尾翼の水平安定板をプロペラでガリガリ齧っていたのです。途端に粟村機は、首をB29の尾部に突っ込んだまま、とんぼ返りでしっぽを上げ、B29の背面に対し七十度くらいの角度で逆さまになり、そのまま瞬時海の方へ走った。離れるとすぐ、昇降舵を齧り取られたB29はみるみる機首を下げ、三回ほどの環状錐揉みの後、空中分解を起こし、真っ逆様に海中へ突っ込んでゆきました。粟村機の方は、落下の途中座席のあたりから機体が真っ二つに裂けたが、その直前、七千メートルの辺りで飛び出した落下傘がうまく開いた。開いたのは、銚子の前だったが、風が強いので自分の眼の前でどんどん沖へ流されてゆく。准尉殿はこの前一週間ほどかかって体当たりの場合、落下傘の降下は何千メートルくらいの高度まで可能か、偏西風何十メートルのとき落下傘は何キロくらい流されるかということを実際に研究されていました。また准尉殿のことですから、あの時必ずまだ弾を残していたに違いありません。粟村准尉殿が全弾を撃ち尽くすというようなことは絶対にありません。またいつも射距離を詰めよということを口癖に言っておられた。弾もあったし、落下傘降下の位置の悪いことも知り抜いておられた。射距離もこれ以上は近寄れないところまで行った。しかもその粟村准尉殿が遂に最後は体当たりをされた。このやむにやまれぬ体当たりの気持ちは、B29を目前に睨み付け、どうしてもこいつを叩き落とさなくてはと思う戦闘機乗りでないと本当には解っていただけないかもしれません」

粟村准尉の旺盛な科学精神も、体当たりそのものさえ科学的に研究し尽くした比類なき理性も、遂にはB29必墜の信念に裏打ちされ、敵撃滅の忠誠心に焔と燃えていたのである。娑婆っ気のない准尉には日記も何もなかったが、ただ一つピストの壁に「大義親(しん)を滅(めっ)す」の銘を書き残している。（この項終り）

B29の模型機を使っての射撃訓練

富士隊ピスト前で愛犬（トン公）を抱く粟村准尉

特集
特攻インタビュー（第9回）
海軍水中特攻
海老澤善佐雄 氏

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
特攻ライブラリー取材スタッフ

「編注・当会では、特攻に関連する史実とその精神を後世に伝承するため、特攻関係者の体験談等を取材し、記録することを企画し、有志会員による「特攻ライブラリー」を立ち上げ、先ず、関係者のインタビュー記事を記録することにいたしました。特攻出撃の如何を問わず、特攻体験をされて九死に一生を得た方、特攻出撃を待機された経験のある方等で、映像と写真を含めたインタビュー取材を引き受けて頂ける方がおられましたら、自薦他薦を問わず、当会事務局までご連絡下さい。」

◇　◇　◇

海老澤善佐雄氏軍歴（略歴）

昭和十四年横須賀海兵団現役入団
海軍上等兵曹
第七十一突撃隊　先任下士官　伏龍隊教員

◇　◇　◇

特攻ライブラリー取材スタッフ
（五十音順）

及川　昌彦　世話人
神崎　夢現　進行
倉形　桃代　記録
提橋　律子　世話人
須貝　智行　写真撮影
高橋　暢　映像撮影
長尾　栄治　インタビュアー・構成

◇　◇　◇

◆三越から海軍へ

――海老澤さんは戦前、三越にお勤めだったそうですね。

海老澤：商業学校を出て、三越百貨店の日本橋本店に勤務していました。20歳になって徴兵検査を受けて海軍に入ったんです。

――徴兵検査では海軍を志願されたのですか？

海老澤：三越の洋食器売り場にいたので、海軍に行けば遠洋航海で、ひょっとしたらロンドンに行ったり、ニューヨークに行ったり、ハワイに行ったり、洋食器の勉強が出来るんじゃないかなあと思っていましたね。よく覚えていないんですけど、徴兵の時、そういうことを言ったかもしれません。今、考えれば欲張り過ぎたんですかね（笑）。

――隣りに、「海軍十四徴会」という戦友会の旗がありますね。

海老澤：昭和14年1月10日、横須賀海兵団に現役入団したんです。同期の戦友会が、「海軍十四徴会」です。入団したのは、アメリカとの戦争が始まる3年前。入団して3年目というと海軍では働き盛りの年齢になるわけです。だから、戦争要員として入ったようなものです。数も多いんです。十四徴会には、全国で5万人くらいいるんです。

◆学歴社会の海軍

海老澤：我々は徴兵ですから、3年の兵役を終えれば満期除隊になるわけですが、海軍は、専門分野を修得する術科学校を出ないと使い物にならないんです。フネを動かすには機関学校、信号兵や電信兵はそれ専門の学校を、テッポウ屋さんは砲術学校を出ないとダメだし、水雷学校を出ないと魚雷を打てない、機雷・爆雷・掃海は機雷学校を出ないとダメだし、全部、術科学校を出ないと使い物にならないんです。

学校を出ていない人は無章といって、左腕の袖に何のマークもつかないんです。術科学校の普通科を出ると一重ザクラが、高等科を出ると八重桜が付きます。海軍に3年もいると、学校を出ないと使い物にならないということが分かりますから、「お前、学校に行って機雷の勉強してくれ」と上の者に頼まれると、「はい、かしこまりました」と。ただ、学校を出ると、さらに2年間、勤務しなければならない。だから、兵役が5年になるわけですね。その後、ラバウルにいた時、また学校に行ってくれと言われると、また2年つくから、7年になるわけです。でも、海軍にいる間は、上の人から言われたら素直に「はい」と言って行きました。ダダをこねて、嫌だ嫌だと言って、無章だった連中も3割くらいいました。

――無章の人は、兵役が終わったら早く帰りたいということだったのでしょうか？

海老澤：そうかもしれませんが、結局、誰一人、3年で帰れた人はいません。戦争が始まりましたからね。

――すると、そういう人は進級も出来ないんですか？

海老澤：ところが海軍はよくしたもんで、頭の切れる者は学校に行かなくても、結構、進級していくんですね。でも、下士官になって、戦艦や巡洋艦、

航空母艦などに配属されても戦闘配置がないんですよ。戦闘配置は術科学校の普通科、高等科出身で役割が決まっているんですね。無章だと最初から役割が存在しない。だから、学校に行かなくて進級した者は弾運びくらいしか用がないわけ。あとは、看護婦の下働きで傷病者の担架運びとか。海軍はそういうシステムなんです。普段、戦争がない時は、甲板掃除とか庶務の仕事、あるいは、「酒保開け」で売店の長になったり、お酒売り場の長になったりしますが、戦闘配置はないんです。

――海老澤さんは海軍機雷学校に進まれたそうですね。どんな教育を受けたのですか？

海老澤：まず、掃海……掃海の場合、ほとんど駆逐艦がやるんです。あとは、駆逐艦の半分くらいの大きさの駆潜艇ですね。機雷は綱に重しをつけて海中に沈めますから、２隻の駆逐艦でその綱を切るわけです。そういう綱を切る教育とか、爆雷……例えば、伏龍で使った爆雷は、信管が壊れて電流が流れて発火装置から爆薬が爆発する……まあ、そういうことを勉強しました。学校には赤本、専門の教科書がありました。

――学校の勉強は難しかったですか？

海老澤：半年ですから、べらぼうに難しいということでもなかったです。普通科は半年、高等科も半年です。海軍はすべて試験……成績順ですからね。普通科を出て高等科に行きたいなと思っても、普通科の成績が上位半分くらいじゃないと高等科に行けないんです。私の場合、普通科を出て、半年後にラバウルに行ったら、高等科に入校が許可されたから帰っていいと言われました。何万人も海軍の兵隊がいるのに、何でわざわざラバウルにいる自分が、と思いましたけど、飛行機ですぐ日本に帰れと、帰されました。

――普通科と高等科では教育内容が違うんですか？

海老澤：内容はともかく、普通科と高等科では進級の度合いが違う。で、小遣いも違うんです（笑）。高等科の八重桜になるとタバコ３箱分の日当が出るんです。普通科だと１箱分です。外出も多少違うんじゃないですか。

◆山本五十六大将からの感状

――話は戻りますが、海兵団を出て最初に乗った艦艇は何でしたか？

海老澤：駆逐艦「春雨」。昭和14年５月です。当時、「春雨」は連合艦隊第一艦隊第二水雷戦隊に所属していました。私は魚雷発射機員付艦長伝令でしたから、艦橋で勤務するわけです。艦長が、「水雷発射用意！」とか「発射準備！」とか号令を出すと、それを発射管室へ艦内電話で伝えるわけです。

――山本五十六連合艦隊司令長官から感状をもらったそうですね

海老澤：駆逐艦が集団で訓練した時、その中で一等をとったと思うんですよ。感状をもらった時はそれほどでもありませんでしたが、山本五十六という名前が入っているので、最近はもらっておいてよかったなあと思います。山本長官から賞状をもらったなんて誰も知りませんからね。

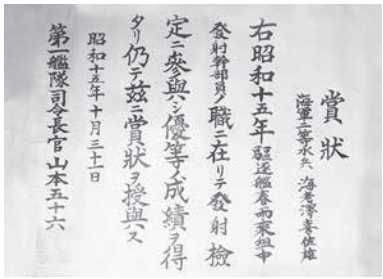
――山本長官は、その後、昭和18年に戦死します。そのことを聞いた時、どう思いましたか？

海老澤：「やられたな」と思いましたね。乗っていた一式陸攻が速度も遅いし、アメリカでは「ライター」と仇名がつくくらいですから、撃てば落ちるというような飛行機に乗って、死の覚悟でブーゲンビル島に行ったんじゃないですか。山本長官は海軍次官の時代から、「１、２年は持つけど、それ以上は持たない。戦争は絶対に反対だ」という精神の持ち主だったでしょう。そういうことも、既に電信兵から聞いていましたからね。仕方がないなと……それほどもガッカリもしませんでしたね。

◆「敵魚雷見ユ！」その時、艦長は。

――「春雨」の次が水上機母艦「秋

駆逐艦「春雨」



賞状

海軍二等水兵　海老澤善俊殿

右昭和十五年駆逐艦春雨乗組中
発射管員ノ職ニ在リテ発射検
定ニ参與シ優等ノ成績ヲ得
タリ仍テ茲ニ賞状ヲ授與ス

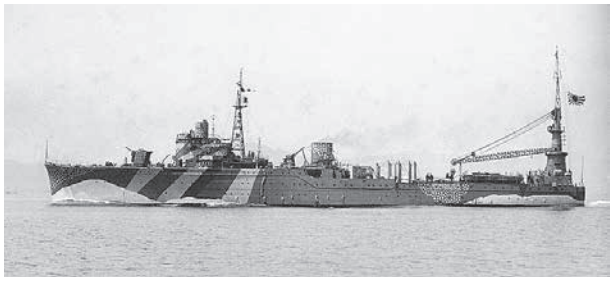
昭和十五年十月三十日

第一艦隊司令長官　山本五十六

山本五十六長官の賞状

津洲」ですね。

海老澤：「春雨」の後、海軍省勤務になって、その後、機雷学校、そして、「秋津洲」乗組みとなりました。まだ、勝ち戦だった昭和17年２月のことです。５月に出航して、サイパン沖でいきなり魚雷攻撃を受けました。私は爆雷投下機長として、後部甲板で見張りをしていたら、艦橋から「魚雷！」という伝令が入りました。すぐ、そちらの方向を見たら、左舷の真横に４本来たんですよ。気がついた時はもう、２００～３００ｍくらいですか。避けられる距離じゃなかったんです。



水上機母艦「秋津洲」

後から、艦橋の様子を聞いたら、艦長がフネを魚雷の方向に向けようとしたらしいです。でも、艦長は、自分では大声で、「取舵一杯！」と言ったつもりなんでしょうけど、魚雷を見て声が出なかったんです。近くの信号兵が、艦長の顔に耳をくっつけるくらい近寄せても聞こえなかったんですって。だから、操舵が１秒か２秒遅れたんじゃないですか。艦長は腰を落として、自ら舵を動かしたそうです。後に艦長は、魚雷が当たったら、もの凄い衝撃が来るから、腰を落としてひざを床につけたと言っていました。とっさにそういう動作に出たと思います。

戦地に行く時でしたから、航空爆弾を満載していましたからね。一発当たったら、木っ端微塵で轟沈です。ところが、アメリカの潜水艦攻撃も初期の頃ですから、不発の魚雷ばかりを積んでいたんですね。４本が全部、不発で終わって、スクリューをちょっと痛めたくらいですんだんです。まあ、艦長は声が出なかったというけど、私も、同じように声が出ませんでした。

――その時の艦長はどなたでしたか。

海老澤：黛治夫大佐です。ライオン艦長と呼ばれ、砲術の大家として有名です。「秋津洲」は新しい船で砲も新しいから、主砲の12・７センチ砲も遠くに飛ぶんです。それまで６０００ｍしか飛ばなかったのが、８５００ｍ飛んだと言いますからね。それで、ラバウルに入った時、敵機の空襲を受けたんですが、艦長はさすが、砲術の大家というか、「敵機が来たら、とにかく大砲を打て。当たらなくてもいいからドンドン打て」ということで、バンバン打ちました。そしたら、アメリカはそれまで６０００ｍまで近づいたのが、次の日から１万ｍで、安全圏で飛ぶようになりました。だから、当たらなくても、全く無駄ではなかったですね。

――ラバウル進出後はガダルカナルへも出撃されたのですね。

海老澤：ガダルカナル近くのツラギには飛行艇部隊の基地がありましたからね。そういうところに行ったりしていたんです。昭和17年８月７日にアメリカ軍がガダルカナル島に上陸しましたが、たまたま、前日の６日にガダルカナル周辺で遊弋していたんです。それで、敵が上陸してきたというので、我々は任務が違うから……「秋津洲」は戦闘艦じゃありませんからね。基地の弾薬、食糧の補給、あとは飛行艇の補修、そういう任務ですから……。すぐ、ラバウルに引き返しました。今思えば、ガダルカナルで勝敗が決まったようなものですよね。ガダルカナルを失わなければ、もう少し戦争は長引いたかもしれない。

ラバウルにいた時は、毎日毎晩、アメリカの爆撃機が空襲に来ました。私は、飛行艇用の機銃、20㎜と７・７㎜の機銃をもらって、毎日２００発以上、撃ちましたね。海軍で一番、機銃を撃った経験があるんじゃないかな。

◆戦地と国内の空気の違い

――その後、機雷学校の高等科に入校するため帰国したのですね。

海老澤：はい。日本に帰ったら、国内はルンルン気分なんですね。灯火管制はやっているものの、夜、兵舎の屋上から見たらデパートのネオンが輝いているんだもの。びっくりしましたね。戦地と比べて全く違う。ガダルカナルの話をしても誰も信じないんですよ。内地では、海軍は強いんだ、勝っているんだ、という認識しかなかったんでしょうね。

――そういう国内のムードが変わったのはいつ頃ですか。

海老澤：昭和18年の暮れ頃からガタガタし始めたんじゃないですか。

――昭和19年10月からは神風特攻が始まり、ニュース映画にもなりました

ね。

海老澤：映画は見ませんでしたけど、もう、上等下士になっていたから、電信とか通信の同期から特攻のことは聞いていました。まあ、いずれは、自分もそうなってもやむを得ないという気持ちはみんな持っていたんじゃないですか。

◆特攻兵器「伏龍」

――「伏龍」が誕生した経緯について簡単にご説明いただけませんか？

海老澤：アメリカが、中国の揚子江辺りから機雷を海に流すわけですね。また、日本近海にも機雷を撒いたんです。その掃海のために、機雷学校を出た専門家が処置をするんです。カッターに乗って、15～16人の作業員が行って掃海作業するわけです。その手間が大変なので、2～3人でその機雷を処置できないかという発想が出まして、昭和17～18年頃から海軍工作学校へお願いしていたんです。工作学校も潜水を簡単にする方法を考えて……今ならアクアラングで簡単に出来るんですけど、かなりの装備をしないと出来ない時代ですから、いろいろ考えた結果、苛性ソーダを通せば、少しは空気の通りが良くなるというので、「伏龍」の原型が出来たわけなんです。

それが軌道に乗ったもので、軍令部の連中が、これは特攻に使えるんじゃないかというので特攻兵器として採用され、急きょ、兵隊を送り込んだんですけど、最初は手の空いている兵隊ばかり集めたので、24歳から27歳くらいの年配の兵隊を集めたんです。ところが、呼吸は鼻で吸って、口から出さなければならないのですが、それが年配の兵隊だとスムーズにいかないんです。それで、甲種予科練、乙種予科練出身者に訓練を頼んだら、スムーズにいったので、若手に切り換えて、甲種と乙種だけを召集して訓練をしたわけです。

――吸う息と吐く息を間違えるとどうなるんですか？

海老澤：苛性ソーダが溶けちゃうんですね。苛性ソーダが溶けて、口の中に入った場合に心臓をやられちゃうわけです。それで生命を落とす人が何人も出たんです。それだけでなく、物がない時の兵器ですからね。溶接に不具合もあったんじゃないかなと思います。

――海老澤さんが教育に当たった場所はどちらでしたか？

海老澤：私は最初から関係していましたから、最初は久里浜海岸で、その後は野比でした。久里浜では犠牲者が多かったですね。日によっては7名くらい亡くなるんですよ。最初はちゃんとお坊さんを呼んでお弔いをして、遺骨は全部、国許へ返したんですけど、余りにも多かったんで、隊によっては海岸で火葬したという話を聞きました。私はその都度、火葬場に行って焼いてもらったんです。

ところが、火葬場の人がスムーズに焼いてくれないんです。火葬場の係長に「なんで焼いてくれないんだ」と聞いたら、「お腹が空いてて死体が運べない」と言うんですね。物がなくて、食事も満足に摂れないんですね。「海軍さん、米を少し分けてくれないか」と頼まれて、主計科で米2トンと缶詰30個くらいもらって渡したら、すぐ焼いてくれました。一時が万事、そういうわけなんです。

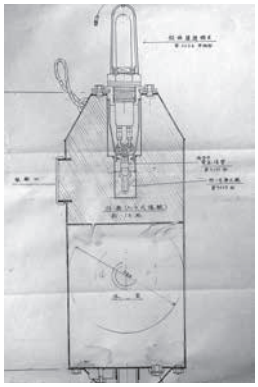
伏龍　正面

伏龍　右側

伏龍　左側

伏龍　背面

伏龍隊勤務の頃


伏龍で使った棒機雷断面図

犠牲者が多かったもう一つの原因が酸素ボンベなんです。伏龍で海に潜るのに、酸素ボンベを2本背負います。当然、ボンベの中の酸素は満タンじゃないといけないのですが、酸素会社がまともに入れてくれないんです。ボンベを50本とか１００本頼んでも、10本くらいしか、ちゃんと酸素を入れてくれなかった。見ただけでは酸素が入っているのか、空なのか分からない。教員も、俄か仕込みの教員ですからね。助かった人に聞くと、海中に潜って酸素が満杯あると思って見たらゼロと表示されて、それを見た瞬間、もう駄目だと思ったらしいです。余りにひどいので、交渉に行ったら、酸素会社の人も海軍のＯＢで、「先任下士官、タバコを都合しろ」と言うんです。それで、酒保に飛んでいって、タバコを７０００本くらいですか、当時、段ボールがなくて木箱ですぐ届けたんです。そしたら、あくる日から酸素ボンベ全部が満杯で来るわけです。その後、酸素ボンベが原因の犠牲者は出ませんでした。

にわか部隊ですから、上の人が酸素の供給まで目が届かないんです。また、酸素会社に行くのは35、36歳くらいの補充兵ですから、帰ってきて士官に、「酸素をもらってきました」と言うだけで、中身を正直に報告していないんです。正直に言って、「なぜ、ちゃんともらってこない」となると、海軍ではすぐビンタが飛んできますからね。ビンタをもらうのが嫌だから、補充兵は「全部もらってきた」とウソの報告をするんです。そういうことで、最初の犠牲者が出たと思うんです。

私が、酸素ボンベのせいで亡くなっているのではないかと気付くまで、７名ずつ、２回亡くなっているんです。殉職者の数は正確には分かりません。私は35人から40人くらいと思うんですけど、人によっては百人以上と、毎日何十人も死んだって言いますね。

――上官も教員も、分からなかったのですね。

海老澤：プロなら分かるんですよ。でも、いないんです。潜水をちゃんと教わったのは、戦艦、巡洋艦、航空母艦などに行っていますから、陸上には、潜水を教える人がほとんどいない。通信兵とか、いろんな人を集めて訓練したのが、にわかの先生ですから。酸素ボンベに空気が入っているかどうかが分からないんです。

◆潜水服は１５０人に１着

――海老澤さんも潜水服を着たんですか。

海老澤：いや、私は機雷の専門家ですからね。それに、私が特攻隊に赴任した昭和20年６月１日の段階では、兵隊だけはいたけど潜水服も何もないんです。それで毎日、軍需部に行って、懐中電灯がほしいとか、羅針盤がほしいとか、訓練のための用具を集めるのでテンテコ舞いでした。

――伏龍隊ではどんな訓練をしたのですか？

海老澤：１隊15人が基本なんです。それが10か12隊ほど集まって１個分隊になります。そこに潜水服が一着分しかないんですよ。だから、１日のうち、５分、10分と潜って訓練出来る兵隊と出来ない兵隊に分かれてしまうんです。まず、潜らなければ特攻になりませんから、その準備だけで追われていました。

――当時の潜水服はどんな感じのものだったのでしょうか？

海老澤：潜水服に管を通して、その管に上から空気を送るんですが、この潜水服が重いんです。錘が片足だけで５kgくらいある。両足で10kg。総重量で70kgくらいですからね。海に入るまでは歩くのもままならない。

だから、15人に対して一着しか用意出来ないから、あとの14人が靴を履かしたり、ズボンをはかしたり、整備をするわけです。日によっては整備だけで終わる人もいるし、潜るのが上手な兵隊は何回でも潜らせるわけです。今思えば、潜る兵隊と整備する兵隊をはっきり分けた方が良かったかもしれません。

――訓練では船から海中に潜ったそうですが、船にいる指揮官との連絡はどうするんですか？

海老澤：綱だけなんですね。船の上で綱を持っている係があって、「上がれ」とか「もっと深く潜れ」とか、簡単な信号だけを綱で送っていたわけです。

――海中で１００メートルほど歩く訓練だったそうですが、隊員も怖かったでしょうね。

海老澤：怖かったでしょうね。あの班で誰々が亡くなったとか、隣りの班で誰々が亡くなったとか、よく耳にしましたからね。俺は潜るのが嫌だって、駄々をこねた兵隊も多かったようです。班長の中には、15人の中から何人か整備担当を選んで、全員が潜らなくてもいいようにした人もいたようです。

――伏龍が、もし実戦で使われたらどうなったと思いますか？

海老澤：そうですね……。分隊長が予備学生なんです。戦場での体験がない人が上に立っても何も指導出来ません

よね。私みたいに、ラバウルに半年もいて、ガダルカナルにも行って、砲爆撃を毎日、朝昼晩受けて……アメリカはどのくらいの弾薬を使って敵前上陸してくるかを目の当たりにしているんです。ですから……当時は駄目だとは言えない。ただ、命令されたことを忠実に守るより他ないですから。言われた通りに訓練をしましたけど。

アメリカの敵前上陸なんか、守っている日本軍の陣地が息もできないほどの砲爆撃をやって、日本の兵隊がいなくなったという状態になってから上陸してくるわけです。上陸してくれば50ｍか１００ｍ飛ばす火炎放射器で掃討するわけですよ。海岸線１００ｍくらいは全部、砲爆撃して、それから上がっていきますからね。伏龍なんて、攻撃に出る前に吹っ飛ばされちゃいますよ。ラバウルにいた時、ガダルカナルまで行った古い兵隊に聞きましたけど、アメリカが上陸してくる時は、こっちから大砲を撃つことも何も出来ず、引っ込んでいるしか他にないそうです。どうすることも出来ない。ですから、伏龍が実戦に出ても……まあ多少の成功はあっても期待するほどの成果はなかったと思いますね。

私のように6年も海軍にいると、同年兵かが通信兵、信号兵の幹部でいるわけです。終戦が近いということは電信兵の幹部から耳に入るわけです。で、食事の時間なんかに、「海老澤さん、もう、駄目だね」って言われて。だから、命令通りに訓練して、やるより他にないなと思っておりました。

――海老澤さんは先任下士官ですから、隊員に個人的に何かを教えるということはやらなかった？

海老澤：個人的に何か教えるとかはしません。言いたいことがあったら、５００人なら５００人全員を集めるんです。棒機雷の使い方とか、兵器の話は何回かやっています。

――回天や震洋など他にいろいろな特攻兵器がありますが、それについては何か？

海老澤：戦中は他の部隊との交流がなかったから、全く知りませんでした。入ってくる予科練生も、伏龍が甲種予科練15期、その前の甲14期が震洋、甲13期が回天に行きましたね。回天が出撃した昭和19年10月頃は日本海軍の船もほとんどなくなっていました。でも、士官はかなり生き残っていますからね。何かやらなければならない、何か……ということで、特攻が生まれたと思うんです。飛行機といっても、作ってもガソリンがない、ガソリンがなきゃ飛ばせませんからね。飛行機以外の特攻兵器で、これはというのは全部やりましたが、今考えると、みんなバカバカしい兵器です。

――特攻について何かご意見がありますか？

海老澤：私は、伏龍隊に行く前は横須賀防備隊にいました。その教育部隊所属の分隊でしたから練習生の教員をずっとやっていて、はたから見ると呑気な配置だったんです。そういう配置に半年か1年いると、その後、一番危ない所に配置転換されるものなんです。ですから、それで私も特攻隊に行かされたのかなあと思います。もっとも、我々の機雷、掃海、爆雷専門の兵隊が乗るフネは危ないフネばかりなんですよ。駆潜艇とか、駆逐艦とか、海防艦とか……。巡洋艦なんかまず乗りません。今思うと、そういうフネに行かないで伏龍隊だった方がむしろ、良かったのかなあとも思いますし。あと、一旦、そういう危ないフネに乗って生き残っても、士官は必ず、また危険な配置に回されるんです。というのは、艦長、副長など長のつく人は艦と運命を共にせよという指令というか、伝統があるものですから、「なぜ帰ってきた」と言われるんですから。海軍というところは、そういうところもありました。

――現在だと、「なぜ、特攻」という疑問が湧きますが、当時は、当たり前という考えがあったのでしょうか？

海老澤：ええ。それに特権もあるんです。普通の兵隊が死ぬと階級は一つも上がらない。士官は1階級上がるんです。それが、特攻の名がつけば2階級か3階級上がる。私のように海軍省から特攻隊行きを命じられた者は戦死したら4階級上がるんです。上等下士だと、兵曹長、少尉、中尉、大尉……つまり、「海軍伏龍隊、海軍大尉・海老澤善佐雄」になるんです。妻も海軍大尉の恩給がもらえる。だから、戦後、苦しいことがあると、「ああ、特攻で死んだ方が良かったかなあ」と思うときもありました（笑）。

私は早くに所帯を持っていましたからね。戦争中に子供もいましたから……。当時のご婦人方は偉いと思いますね。私が特攻隊員だった時に嫁に来たんですから。死ぬのを分かっていて嫁に来た。今では考えられないですよね。話は飛びますが、伏龍隊の司令部付きの上等下士が昭和20年8月12日に結婚式を挙げたんですよ。考えられます？　どうせ死ぬのだから嫁さんをもらって死のうというのか、あるいは、もう少しで戦争が終わると分かっていて結婚したのか、分かりませんが。

◆甲種予科練と乙種予科練の騎馬戦

――終戦の情報を事前に聞いていたということですが、８月15日の玉音放送は冷静に聞けたのですか？

海老澤：ガーガー騒音だけで……ちゃんと聞かせないようにしたのかな（笑）。それで、周りの人に「何て言ったの」と聞いたら、「戦争はこれから激しくなるから、特攻隊員は頑張れということだ」と言うんです。ですから、終戦から１週間、猛訓練を続けましたよ。そのうち、厚木航空隊からビラが飛んで来たりして、あれ、変だなと……。結局、訓練は終了するという停戦命令を受けたのは８月22日でした。

――その時のお気持ちは。

海老澤：ラバウルから帰ってきた時、アメリカ軍を、もう手の付けられない相手と思っていましたからね。その頃、病院に下宿していたんですけど、そこの先生が、「海老澤さん、戦争はどう？」と聞くから、首を横に振りました。「ダメ」と言葉に出したら軍法会議ものですからね。その先生は、その後、疎開しました。

――伏龍隊の隊員は10代、20代の青年たちだったと思いますが、海老澤さんから見て、彼らはどのような青年たちでしたか？

海老澤：20代なんていないですよ。みんな、16、17歳ですよね。私は５００人の中の年長者でした。だから、みんな弟というよりも、自分の子供みたいなもんですよね。上官もみんな予備学生で20歳前後の若い人ばかりですから、私が一番の年長者。だから、その頃、私は26歳でしたけど、気持ち的には34、35歳、いや40歳くらいのつもりでいました。

――予科練も甲種と乙種がありますが、それぞれ雰囲気は違っていましたか。

海老澤：違いましたね。乙種は甲種よりも進級がずっと遅いんです。甲種に入った者はみんな、自分たちは海軍兵学校並みだというつもりでいて、進級も兵学校並みと教えられて来ていますから……。例えば、甲種と乙種に分けて騎馬戦をさせたんです。乙種は甲種に対して、もの凄いライバル心があるから猛烈な団結心があるわけです。甲種は優越感があるからそれほどでもない。騎馬戦をやらせると雲泥の差で乙種の方が強いんです。「甲種の奴らを生かしてなるものか」というくらい闘争心をむき出しにしてやるんですね。甲種は幹部候補生として入ってきているつもりだから、真面目だけど乙種に比べて大人しい。乙種は手に竹刀のツバをつけて殴ったそうです。甲種はみんな鼻血を出して倒れてました。まあ、乙種の方が若干、「与太っている」人間が多かったんじゃないですか。

――タイプの違う部下をまとめるのに苦労したのではないですか？

海老澤：今みたいに、部下に気遣いしたり、部下が上司に自由に意見を言うような時代じゃないですからね。上から一方的に命令するだけですから。上等下士がものを言ったら、百％その通りになるんです。命令には絶対服従の時代でしたからね。部下をまとめる苦労なんて考えてもいなかったですね。

――当時の隊員の年齢は今の高校生くらいの年齢ですが、全然違いましたか？

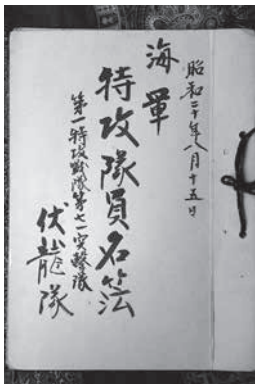
海老澤：テレビとかで今の高校生の姿を見てると、今の10代の方が、考え方が大人っぽいですよ。10歳は年が違うような……大人と子供くらいに違いますね。今は、自由に発言出来るから大人っぽく感じるのかもしれません。当時は発言を全部封じられているから子供っぽい……。今、我々が若い人にどうのこうのと言えないですよね。時代が違うから、ついていけないですよね。

◆「伏龍会」と「海軍十四徴会」

――６年間の海軍生活の中で、海老澤さんが特攻に関わった年月は短いものでしたが、特攻隊の一員だったということは特別な意味を持ちますか？

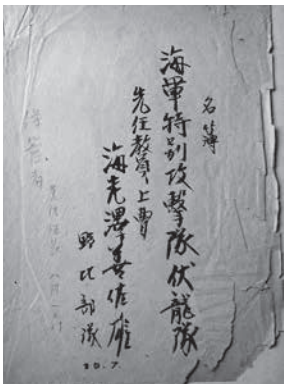
海老澤：海軍に６年いて特攻隊だったのは３ヵ月です。同期にも伏龍隊にいた者がいますが、バカバカしいと言って伏龍隊のことなんか無視する者もいます。だけど、誰かが伏龍隊の面倒を見なければならない。だから私が最後まで面倒をみて……面倒をみると言ったら大げさですけど、関係している状態なんですよ。

戦後、「伏龍会」というものがなかったものですから、今から35年前ですかね、朝日新聞に当時、木曜日でしたか、戦友会のことを載せてくれるページがあったんです。それに毎週、「海軍伏龍隊の関係者の方、ご連絡ください」という記事を10年くらい出したんです。それで、一人、二人、三人と連絡が入り、それが３００何名になって、「伏龍会」という戦友会を作りました。今でも「伏龍しか知らないから入れてください」という人がいます。だから、最初は２、３人から始まった会なんです。集まれば、いろいろな話になるんですけど、予科練で三重航空隊に入隊したなんて話が中心になって、伏龍の話は二の次になっちゃうんです。伏龍隊に来た予科練生は三重空出身者が多



終戦時に作成した書類

終戦時に作成した書類



終戦時に作成した書類

かったですからね。だから、伏龍しか知らない者は長続きしないです。三重空の戦友会の方が中心になるんですね。

私の同期も、「長門」に乗った……「陸奥」に乗った……「赤城」に乗った……と、いろいろなフネに乗っていますが、同期が集まるのはやはり、この「海軍十四徴会」です。同期の８割が「海軍十四徴会」に集まりますね。「お前、何年兵？」、「十四徴」、「じゃあ同年兵だな。同期の桜だな」という方が話は早い。それだけで親兄弟以上になるんです。

――「十三徴」、「十四徴」……それだけで、どういう経験をしたかが分かるんですか？

海老澤：はい。「十四徴」だけで喜びも悲しみも分かるんです。

――「十四徴」の方も特攻経験者は多いと思うのですが、特攻の体験談をお聞きになったことはありますか？

海老澤：「十四徴会」には１５００人くらいいるんですけど、戦後に聞いた限りでは、特攻にいた人は誰もいないですね。特攻隊でも、庶務とか直接関係のない部署にいた者はいるけど、それは特攻ではないですからね。直接、特攻隊に関係しているのは私だけみたいですね。

――そうすると、海老澤さんや同期の方は特攻をわりと客観的に評価できると思うのですが、海老澤さんから見て特攻をどうお考えにありますか？

海老澤：「特攻とはなんぞや」と問われたら「勇敢な人だな」と思いますね。何よりもまず、勇敢だと思います。「特攻」と言えば、「恐怖」を思いますね。「恐ろしい」、「怖い」と。だから、「恐怖」を乗り越えて特攻に出撃した方、亡くなった方は偉いなと思います。

◆決起を誓い武器を隠す

海老澤：戦争が終わって８月22日に訓練を止めた日に、伏龍の戦闘用具を全部、野比海岸に穴を掘って埋めたんです。その時、事故で岩手県の17歳の隊員が兵器と一緒に穴に落ちて、首の骨を折って亡くなったんです。同室の15人と一緒に、野比の焼き場に持って行って焼いて、ふと見たら、みんな足がガタガタ震えてるんですね。かわいそうだから、みんな返して、骨壷なんかないから、木箱に骨を入れて野比のお寺に行ったら、「伏龍隊の遺骨は浦賀に収めているから浦賀に行け」と言われてね。もう、午前２時くらいでしたが仕方なく木箱を背負って……骨壷じゃないから熱くて……木が焦げてるんですね。カチカチ山の狸みたいになりながら、一人で浦賀のお寺に行きました。隊に戻ったのは４時くらいでしたね。その後の後始末は、海軍では主計科がやることになっているんです。私は兵科で主計科ではないですから、その後、どのように遺族に連絡したのかは分かりません。戦後、10年くらい経ってから、その遺骨を預けた寺に行ったんですよ。そしたら、「うちには戦没者の遺骨は一つもありません」と言われたので、安心して帰ってきました。亡くなった方の住所も知っていましたので、その家に手紙を出しましたが、「私は嫁ですが、お祖父さんも、お父さんも、兄弟も全部亡くなって、嫁に来た身分で、伏龍に出た息子さんの顔も知りませんからこれから一切、連絡しないで結構です」という返事が来ました。

――私たちは戦争体験を後世に残す活動を行っているのですが、海老澤さんは長い海軍体験を通じて何か語り継ぎたいことはありませんか？

海老澤：国を思う余り……明治時代の人は国を大きくしたいばっかりに、日清戦争とか日露戦争をやって……戦争をやって勝てば領土が増え、大きくなるわけですよね。戦争をやらなければ国は大きくならないんです。その反面、戦争は絶対嫌だという考えもあるし……。だから、領土問題を考えても戦争はいけない、だけど、戦争をしなければ国は大きくならない、という考えが頭の中に渦巻くんですよね。難しいんですよ。

でも、戦争って、今の人にとってはゲーム感覚なんじゃないですか。家庭を持っていない、親はいない、兄弟もそんなにいない、そういう人は「戦争

ゴッコ」をしたくなるんじゃないですかね。日本全国で集めれば、そういう人が何千、何万といるような気がします。もし、徴兵制が復活したら、行かせて下さいという人が結構いるんじゃないですか？　生活が行き詰まれば、徴兵制を望む雰囲気が出てくるんじゃないですかね……。当時、海軍に入る人は岩手県と宮崎県出身者が多かったんです。「困ったら海軍に行け。学費がタダだし、小遣いももらえる、着る物ももらえる」って。貧しいから、食べるにも困ったからですよね。海軍兵学校を落ちたら、「じゃあ、下士官でいいから海軍に行け」と言われたといいますよ。

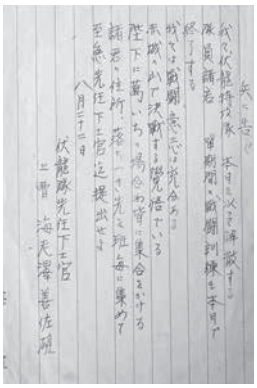
まあ、戦争中は、我々は死ぬというのが当たり前だと思っていましたから。特攻隊で結婚して、妻も子供もいて、自分が死んだ後、どうするんだろうという考えもありませんでしたね。死んだら死んだで、軍人恩給で、米や味噌くらい買えるだろうくらいの考えしかなかったですから……。

――戦後70年近くまで過ぎて、今、あの時代は何だったんだろうと思うことはありますか？

海老澤：よく生き延びて、ここまで来たなあと思いますよね。士官でもない、分隊長でもない、特攻隊司令でもない……単なる上等下士に過ぎない私が、天皇を守るため、特攻隊の集まる場所まで指定したんですからね。武器や用具まで準備した。天皇を守る一心に……。まあ、実際に特攻に出すこともなく、ここまで来て良かったと思いますけどね。

――終戦で停戦命令が出て、その後、隊員や武器はどうしたんですか？

海老澤：他の特攻隊はいろいろやっているのに、うちは特攻らしいことを何もしていませんでしたからね。万が一のことがあった場合、特攻隊の連中が集まって天皇陛下を守ろうと、そんな話をしていました。それで、こんな決起書のようなものを作りました。



海老澤さんが書いた決意書

「兵に告ぐ。

我々伏龍特攻隊は、本日を以て解散する。隊員諸君、戦闘訓練を本日修了する。我々は戦闘意欲は十分ある。天城の山で決戦する覚悟でいる。陛下に万が一の場合は皆に集合をかける。諸君の住所、落ち着き先を班ごとに集めて至急、先任下士官まで提出せよ。

八月二十二日

伏龍隊先任下士官　海老澤善佐雄」

――この決意書は海老澤さんが発意したのですか？

海老澤：そうです。伏龍隊の分隊長は予備学生ですからね。私よりも3歳くらい若い人ですよ。学歴で上官になりましたけど、戦争のことも軍隊のことも何も知りませんからね。兵曹長も何人かいましたけど、みんな兵科じゃなく、潜水を知っている人が指導に来ているわけですから、私みたいにテッポウを撃って戦争をするような人間じゃなかったから、眼中になかったですね。オレが上だみたいに思っていましたから。

で、米と武器を予備学生の隊長の家に集めることになったんです。手榴弾500発と米20俵を半日かかりで隊長と2人で運びました。それで、隊長の家というのがよく覚えていないんですが、横須賀の先の山の上あたりだったような気がします。戦後、私は一度もそこを訪れていないし、米をねだったこともないから、その後、米と武器がどうなったかは知らないんです。米はともかく手榴弾はどうしたんだろう……。海が近くにあったから、海岸辺りに捨てたと思いますよ。伏龍で使った爆雷も、野比にいた上の連中が海岸近くの防空壕に埋めたらしいです。

それで、今から10年くらい前ですか、伏龍の破棄爆薬が原因で、野比の民間工場で爆発事故がありました。でも、伏龍の関係者は誰一人名乗り出ませんでした。よっぽど私が名乗り出て、自分の部隊の責任ですと言おうかと思いましたが、新聞沙汰になって槍玉に上がっても困るから黙っていましたけど。本当は軍需部に納めなきゃいけないものなんです。終戦のドタバタであんなことになったんですね。

――今日は貴重なお話をありがとうございました。

（……了……）

海老澤さんの海兵団時代集合写真

海老澤　善佐雄氏（伏龍特別攻撃隊 第七十一突撃隊）軍歴

1918年（大正７年）	東京都世田谷区に生まれる。
1939年（昭和14年）１月	横須賀海兵団に現役入団。
1939年（昭和14年）５月	駆逐艦「春雨」乗艦。
1941年（昭和16年）４月	海軍省勤務。連合艦隊第一通信司令部庶務部助手
1941年（昭和16年）９月	海軍機雷学校普通科練習生。
1942年（昭和17年）２月	水上機母艦「秋津洲」乗艦。
1943年（昭和18年）５月	横須賀防備隊勤務。
1945年（昭和20年）６月	海軍対潜学校久里浜第一警備隊　伏龍隊教員を命じられる。
1945年（昭和20年）７月	第七十一突撃隊付を命じられる。先任教員、先任下士官、先任伍長勤務。
1945年（昭和20年）８月22日	第七十一突撃隊解散。

オペラになった特攻隊の物語「ＫＡＭＩＫＡＺＥ―神風―」

評議員　倉形　桃代

去る1月31日・2月2日・3日上野の東京文化会館大ホールにて、作曲家三枝成彰氏の新作オペラ「ＫＡＭＩＫＡＺＥ―神風―」の公演が行われた。会報の前号（94号）でも紹介記事を書かせて頂いたが、ご縁あって、この度の公演を鑑賞させて頂いた。劇場でオペラを観るのは初めての体験だったが、特攻隊をテーマにしたオペラ作品もまた、これまで上演されたことのない題材である。三枝氏は、これまで「忠臣蔵」「ヤマトタケル」等、日本の物語を音楽で表現されてきた。今回の「神風」も、生涯で絶対に作りたかったテーマの一つであったとのことで、入魂の作品が世界に向けて発信されたのである。各界の著名人が客席に沢山いらしたことに驚いたが、様々な視点の方々がオペラを通して「特攻」に接し考える一つのきっかけになったと思う。私自身も、新しい分野から「特攻」を捕らえる良い機会を頂けたと感謝している。

開演前、客席とステージを仕切る幕に、日本画家・千住博氏が描かれた蒼い波が微妙に揺らめき、これから始まる世界に誘われるような、不思議な演出がされていた。今回の舞台では、この波を始め、ＣＧ化した日本画を背景として投射する技法が使用され、特攻機が飛行場から離陸して飛び去るシーンや、木立ちから覗く満月・満開の桜がはらはらと散るシーン等、狭い舞台に空間の広がりを感じる演出がなされた。時に登場人物さえ、絵の一部のように感じる瞬間があった。その風情がとても日本的で美しいと思った。特にラスト・シーンで本物の桜吹雪（桜色の紙吹雪）が、恰も舞台を埋め尽くすかのように降るシーンは圧巻であった。

物語は数か国語で「私達に平和をお与えください」と歌う合唱から始まる。

〈あらすじ〉

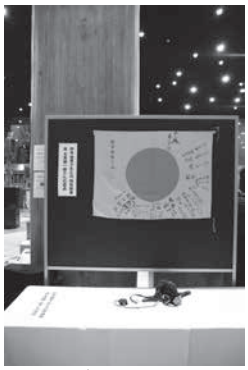
時は昭和20年、陸軍特別攻撃隊出撃の最前線基地である鹿児島県の知覧飛行場で出撃を待つ神崎光司少尉の元に東京から、婚約者・土田知子が訪ねて来る。お気に入りのワンピースに身を包み、着物の袖を切って作った草色の襟巻をしている。神崎少尉は、翌日出撃する事を知子に告げることができずにいるが、知子は胸騒ぎを覚えていた。二人は、知子が宿泊する富田食堂の２階の部屋で、幸せだった日々の思い出を語り合いながら最後の夜を過ごす。外は激しい雷雨。知子は「あなたが死ぬなら私も死にます」と泣き崩れる。

いつの間にか泣き疲れて眠ってしまう知子。そして出撃の朝が来た。眠っている知子の横で、神崎少尉は煙草を一服吸い、知子の草色の襟巻を白いマフラーの下に巻いて基地へ戻って行く。残された知子は、神崎少尉の遺書を読み、特攻隊員として出撃したことを知る。窓の外には満開の桜が雪のように散っている。桜吹雪に包まれながら、知子は愛する人の後を追い、自ら命を絶つ。

◇

休憩を挟んで約3時間の作品だった。物語の結末は事実とは異なっているが、前編を通して流れる音楽の美しさ・色彩の美しさに、日本人の感性・凛々しい精神を感じたのは、私だけではなかったと思う。劇中でオーケストラによって奏でられた「同期の桜」は、深く哀しく美しく心の奥底に響いた。

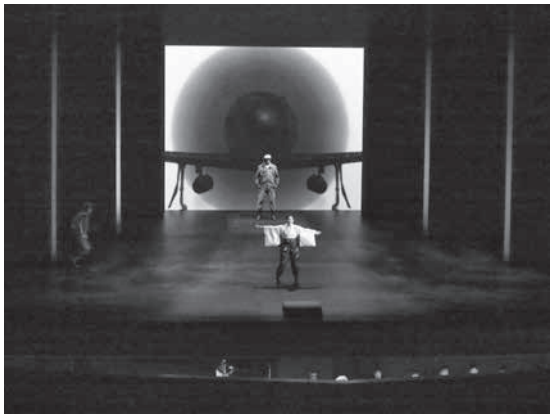
2月3日の千秋楽には、この物語のヒロイン・知子のモデルである伊達智恵子さんも来場された。三枝氏はじめ、原案の堀紘一氏・脚本の福島敏朗氏・演出の三枝健起氏・美術の千住博氏・アリアの歌詞を書かれた大貫妙子さん・・・この舞台を作られた方々が、代わる代わる智恵子さんに挨拶に来られた。智恵子さんは、この日の為に体調を整えられ、来場されたのである。智恵子さんが特に面会を希望されていた大貫妙子さんは、舞台の史実監修をされた大貫健一郎氏の娘さんでいらっしゃる。大貫氏は、神崎少尉のモデルとなった穴澤利夫少尉と同期生（特操一期）で、戦時中に接点があったそうで、智恵子さんは若い頃、当時の思い出話を聞かせて頂いたそうだ。残念ながら、大貫氏は、舞台の完成を観ることなく、昨年亡くなられた。ロビーには、大貫氏のご遺品・飛行帽と日の丸の寄せ書きが飾られていた。智恵子さんは舞台を観ながら「時々胸の奥から強い感情が突き上げて来るのよ」と仰った。飛行服に身を包んだ舞台の上の特攻隊員の姿に、穴澤少尉の面影を重ねていらしたのだろうか。公演の最後のカーテン・コールでは、恐縮される智恵子さんを、三枝氏が舞台上にお連れして紹介をされた。智恵子さんの来場は一部の方しか知らなかったようで、歌手の方々も観客にとって、まさに『ビック・サプライズ』になった。


会場ロビーに展示された大貫健一郎氏のご遺品

智恵子さんは知子のように、自分の命を絶ったりされなかった。穴澤少尉が残された言葉通り、しっかりとご自分の人生を歩んで来られた。この世では添い遂げられなかったが、最愛の恋人の生き様を、穴澤少尉は嬉しいお気持ちで見守っていらっしゃるに違いない。

私と三枝氏とのご縁は、2年前に自衛隊の機関誌の取材に同行した時に始まる。その折に、穴澤少尉と智恵子さんのエピソードをベースにオペラを作ると伺い、たまたま智恵子さんを存じており、まだご存命だということをお伝えすると、是非お目に掛りたいと希望された。まずは智恵子さんの御意思を確認したいという事で、昔から交流を続けていらっしゃった当顕彰会の栗原宏前監事に相談した。諸事情で公演前の面会は叶わなかったが、栗原前監事の仲介のお蔭で、私と智恵子さんの交流は再開できたのである。その栗原前監事も昨年急逝された。私にとって、夫の元上司としても、大変お世話になった方であり、会での活動についても色々相談に乗って頂いた。この舞台を智恵子さんと一緒に観て頂きたかった。頼もしい先輩を失ったことは、とても心細く淋しいことである。

この場を借りて、感謝と哀悼の気持ちを捧げつつ、栗原先輩のご冥福を心からお祈り申し上げます。



「私達に平和をお与え下さい」の合唱

カーテンコール（前列中央が智恵子さん）

智恵子さんとのこと
―「土田知子」のモデルとなった女性の実像―

公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会　倉形　桃代

オペラ「KAMIKAZE―神風―」の公演実現を、心よりお祝い申し上げます。

私が初めて智恵子さんに会ったのは30年程前、20歳の頃でした。世田谷にある特攻観音様の法要の席であったと記憶しています。当時、お参りにみえる方はご遺族・戦友の方がほとんどで、若輩の私は「お若いのに何故？」と不思議がられながらも輪の中に入れて頂き、一緒にお経をあげたり、戦時中の体験談を伺ったり、今思えばとても貴重な体験をさせて頂きました。女性が少ない場で小さくなっていた私にとって、聡明で闊達な印象の智恵子さんとご一緒できたことは、たいへん心強いことでした。暫く交流は途絶えましたが、数年前、靖國神社での特攻隊戦没者慰霊祭で二十数年ぶりに再会しました。お歳を重ねられても、昔の印象と全く変わらない智恵子さんも、私のことを覚えていて下さって、喜びもひとしおでした。

オペラ「KAMIKAZE―神風―」の物語のベースになった穴澤利夫少尉と智恵子さんのエピソードは、これまで多くの演劇やドラマ・書物でも紹介されました。特に穴澤少尉が婚約者・智恵子さんに宛てた力強くも哀しい『ラスト・メッセージ』遺書は、淡々と綴られた文面の行間に溢れる、文字に出来なかった心情を思う時、私は切なさで胸が一杯になります。

自分の気持ちそのままに行動できなかった時代、「戦争」という個人の力ではどうにもならない流れの中で出逢ったお二人。その愛の結実は叶いませんでしたが、今も一部残る3年間の交際期間に交わされた手紙・穴澤少尉の日記には、お二人が心から尊敬し合い、愛情を育んだ日々の心の軌跡が刻まれています。共に過ごした一瞬一瞬は、短いながらも凝縮された時間だったと思います。

穴澤少尉が航空兵として各地で猛訓練を受けている最中の日記には、やっと会えた智恵子さんと一緒に過ごせた日の喜び、離れて過ごす淋しさ、戦友との団欒のひと時、個人的な感傷を記しつつも、当時の若者達が心に抱いていた「身を挺して国（愛するもの）を護る」という決意、「国の要請に応えよう」という澄んだ気概も記されています。

特別攻撃隊員として愛機と共に「散ってゆく男子として」後に残される婚約者の将来を気遣う静かなメッセージを記す覚悟に至るまでの心の葛藤や苦悩を、穴澤少尉はどのように自分の中で昇華させたのでしょう？今の時代にあって、そのお気持ちを計り知ることはできないかもしれませんが、もし自分が同じ立場に置かれたらと想像することはできます。人生の目標・夢や希望を目指して生きてきた青年達が、祖国の危急存亡を前に、身を挺して国難に立ち向かう気持ちになったのは、教育もあったと思いますが、ごく自然に心に湧いた感情であったと思います。それは取りも直さず、自分が生まれ育った故郷・愛する家族や恋人を護ることだからです。銃後の智恵子さん達もまた、自分達の立場で国の為に役立ちたいというお気持ちでいらしたのです。

通信手段が少なかった当時、手紙は相手に思いの丈を伝える唯一のツールでした。今は電子メールや携帯電話が当たり前のようにコミュニケーションの手段として使われています。キーを押して文章を作り、ワンタッチで簡単に消してしまえるメッセージのやりとりが日常茶飯事に行われるようにな

り、手紙を書く機会は、滅多にありません。便箋にペンを走らせ、胸の内を文字に託して伝える。交際期間中、お二人の間で交わされた手紙は何通あったのでしょう？

智恵子さんは空襲が始まった時、万が一の事態を考えて、大切にとっておいた手紙を大事な部分だけノートに書き写し、焼却されたそうです。穴澤少尉の日記にも、出撃前に最後まで手元に残しておいた手紙を焼いたという記述があります。そのほとんどが智恵子さんからのもので、文中に書かれた歌を日記に書き写して「余香を残さむ」とされました。心を形にした大切な手紙を焼くのはとても淋しいことですが、燃え尽きて炎は消えても、伝えられたメッセージは、しっかりとお互いの心に刻まれたことでしょう。

お二人のエピソードの中で、私の心に最も印象深く残っているのは『マフラーの話』です。

昭和19年の11月に戦地から送られてきた手紙に、穴澤少尉の凛々しい飛行服姿の写真が同封されていました。その胸元に巻かれた白いマフラーを見て「あなたのマフラーになりたい」と手紙に綴った智恵子さん。再会の日、首に巻いていたお気に入りのジャージ生地の襟巻を「貸して欲しい」と言われ、何気なく外して渡したのを、穴澤少尉は直にご自分の白いマフラーの下に巻いて、そのまま行ってしまわれたそうです。僅かに温もりが残っていたであろう襟巻は、首に触れた瞬間から穴澤少尉にとって、智恵子さんの分身であり、最期の日まで一番の宝物、そして『お守り』になりました。出撃前の整列時に撮影された写真には、しっかりと『お守り』を首に巻き、軍刀を握りしめた穴澤少尉の後姿が写っています。首の後ろのマフラーが大きく盛り上がっています。最期の瞬間まで、お二人の心はしっかりと結ばれていたのです。

ここ数カ月の間、何度か智恵子さんと電話でお話をする機会を頂きました。智恵子さんは、お二人のプラトニック・ラブや時代背景について「恋愛もコミュニケーションも自由にできる現代の若い方々に理解できるかしら？これまで乞われて若い人に話をした時、戦争中結ばれなかった男女の関係が可哀相、だから戦争はいけないという感想ばかりだったの。その背景にあるものをもっと分かって欲しかったのに、時代が違うから無理なのかしら？」と、何度も仰っていました。当時のことを学ぶ時、今の時代感覚で判断しては正しい理解に繋がりません。時代背景をよく学び、当時の方々の心に自分の心を重ねて感じる・想像力を働かせる努力をすれば、自ずとその方の気持ちや体験に近いものを受け取ることが出来るのではないか・・・これまでの自分の体験から感じることです。

「あなたの幸を希ふ以外に何物もない」「強くそして明るく生きよ」智恵子さんは、穴澤少尉が残された数々の言葉に相応しい人間でありたい、その為にはどう生きたら良いかと自問自答しながら、これまでの人生を歩んで来られました。「いつまでもあなたの生きゆく正しき姿を見守ってゆく」穴澤少尉もその約束通り、智恵子さんをずっと見守っておられるに違いありません。

智恵子さんはインタビュー記事の中で、以下のような話をされています。

◇

戦争中は、社会・国がそういう流れだったから、個人の力ではどうすることもできなかったのです。戦争を止めるとか、戦争に行くなということは全く言いたくもないし、言われても出来ませんでした。そういう時代によって揉みくちゃにされた国民がいて、どうにもならなかった時代があった。自分の理想や夢を叶えることなく生きることを断たれた人達が沢山いたということを、その上に今の平和があることを忘れないで欲しいです。そして自分自身がどう生きるかということを真剣に考えて欲しいということを、若い方達に言いたいの。具体的には、毎日の積み重ね。今日一日の積み重ねが未来に続くんだから、今日を一番真剣に一生懸命に生きて欲しいと思うの。今の人は、みんな子孫なんて考えないでしょ？私達は確かに先祖の過ち、良いことも悪いことも受けて現在まで来てますからね。自分達の行為が未来に繋がるっていうことを分かって欲しいです。

◇

穴澤少尉や多くの大先輩方が身を挺して護り抜いた日本。今、それを受け継いで、未来に渡す立場にいる私達は、しっかりと申し送る努力をしなければなりません。すべての日本人が、祖国の礎となられた方々のことを忘れず、ごく自然に感謝と敬意を捧げられる、そんな国になって欲しい。私もその為に何が出来るか、何をすべきか、これからも考えながら生きていきたいと思います。オペラに籠められたレクイエムが、天国の御霊の元に届きますように。

（三枝成彰：オペラ「KAMIKAZE―神風―」プログラムより転載）

特攻コラム（その一）

○特攻隊員を悼む

昭和20年新春の頃、筆者は小学校1年生、神戸市近隣に居住していた。3月末には、母親の実家へ縁故疎開した関係上、厳しくなった都会の生活は印象に深い。なかでも、20機30機といった大編隊の戦闘機が、低空を西に向けて航進して行く勇姿を再三目撃した。「まだまだ（戦闘機が）仰山あるなあ」という歓声と一緒に「あれ皆特攻に行くんやで」という声もあり、皆で力一杯手を振ったものである。既に特攻隊の何たるかをうすうす承知していたことから、小さな拳を握り締め、「早く大きくなって、僕も続く」と幼い気持ちを高ぶらせたのも、遥かな思い出である。以来馬齢を重ねて68年になる。しかし、この間、あの光景は、目に焼き付いたままである。そして、人生の全期間を通じて、特攻隊員の気持ちに思いを致し、ともすれば流れがちな人生観を奮い立たせ、己を鞭打つ規範としてきたのも事実である。かように、特攻隊の事実は、私にとって大きな存在であり続けてきたのであるが、この度機会を得て、若くして邦家に殉じた勇士の方々への追悼の気持ちから、特攻隊に関わるあれこれを、紙上を借りて紹介したい。

初回は、操縦者養成の話から始めたい。次表は、主要な帝国海軍操縦要員採用数である。（出典・雨倉孝之・海軍航空の基礎知識他）

区分／年別	兵学校	予備学生	予科練甲	予科練乙・特乙・丙
昭和15年	106	32	590	
昭和16年	227	43	1296	
昭和17年	260	310	2288	6093
昭和18年	301	4726	31203	8559
昭和19年	462	3808	78037	39080

これらの要員の養成には、兵学校・予備学生で1年半、予科練で2年が必要であったことから、養成面で大変出遅れたことが、指摘される。昭和17年の損耗操縦者は約２０００名に上ったことから、緒戦における戦域拡大・空母増艦による所要増と相俟って、慢性的な操縦者不足に陥ったのである。片や米国は、昭和15年にスターク計画と言われる海軍１万５０００機体制を開始、操縦者はＲＯＴＣ（予備士官訓練隊）プロジェクトにより、年間３万名の海軍操縦士官の養成を始めた。これは大学生を対象に予備学生として在学中から飛行訓練を開始し、卒業後短時間に操縦将校として活躍させる方式で、現在も米軍操縦者養成の主柱である。本計画が軌道に乗り出した昭和17年以降、航空戦況が逆転していったのは、皆さんご承知のとおりである。

昭和18年に至り、我が国もこれはならじと、米国方式を参考に大量動員に踏み切り、いわゆる学徒動員を始め、若人の募集に力を入れる。そして昭和18年９月、予備学生約５０００名の入隊が始まる。操縦者の主柱であった予科練習生は何と４万名に上る採用を行った。しかし、操縦者の養成には、練習機は勿論、飛行場・教官操縦者の大増強が必要であるが、一挙に10倍の要員を教育することは、物理的に不可能であることは明らかである。これは、陸軍も全く同じ状況で、昭和18年10月以降、特別操縦見習士官制度を発足させ、終戦までに約８０００名を養成した。勿論主力である少年飛行兵の大規模増員を行い、終戦までに20期４万名を養成したとされる。

一般に、操縦者の養成はどの程度の教育期間と飛行経験が必要なのかというと、なかなかの難問であるが、基本操縦技術、夜間・全天候条件での技術、そして、機種別の戦闘技術の習得が必要であり、３００時間、２年程度の経験が望ましいのが通説である。ここで参考に、土方敏夫さんの著『海軍予備学生零戦空戦記』を紹介する。土方さんは、13期予備学生のトップを切って昭和18年９月入隊、並み外れた操縦技能で、同期の先頭を行き、零戦パイロットとして沖縄戦特攻隊護衛戦闘機操縦者として活躍し、撃墜記録も持つ名パイロットである。この著の特徴は、「予備学生」らしく、戦後教壇に復帰し、教職員・外務省帰国子女教育に従事され、退官後80歳を越えて執筆されたことから、大変落ち着いた文調であること、離隊時、自分の全飛行経歴（飛行記録）を持って帰られたこと、当時の日記の一部を持っておられることか

ら、飛行行動について、極めて正確な資料に基づいていることである。土方さんは2年弱の操縦者勤務で約４００時間の経歴を持っておられるが、その概要は昭和18年10月から同19年3月まで練習機34時間、同19年4月から8月まで実用機（零戦・96戦）45時間の実績である。以降元山空教官、沖縄戦に活躍されるが、前半の1年で約１００時間、後半の1年で３００時間を飛び抜いたということになる。これは13期のエースが先頭を切った経歴であり、恐らく、予備学生13期後半、14期、そして、同時期に教育を受けた予科練大量生産期の皆さんは、１００時間、２００時間という全く初心者の段階で、昭和20年を迎え、特攻隊員として投入されたのである。筆者は航空自衛隊戦闘機操縦者の出身で、自己の操縦者としての成長の過程を考えるにつけ、航空特攻で散華された勇士たちのことを偲ぶ時、せめてあと１００時間の経験があれば、と瞼を熱くする次第である。それにしても、操縦者について、開戦と同時に大量養成に踏み切らなかったところに、総力戦への取り組みの遅れを痛感する。

（ペンネーム・蒼蒼子）

平成25年度第1回理事会及び定時評議員会等報告

事務局長　羽渕　徹也

一　平成25年度第1回理事会の開催

平成25年2月28日（木）、当顕彰会事務室において、平成24年度事業報告及び決算報告、並びに理事長の再任を含む新たな役員等人事について審議され、いずれも原案どおり評議員会に付議することが承認されました。

また、昨年から会同を重ねている全体委員会の内容に関し、衣笠専務理事から報告が行われました。

二　平成25年度定時評議員会の開催

これまで理事会と同日に開催されていた評議員会が、別日の平成25年3月5日（火）に、靖國会館九段の間において開催され、平成24年度事業報告及び決算報告、並びに理事長を含む理事全員の任期満了に伴う次年度以降への再任及び新任監事の就任を含む役員等人事に関する各決議案について審議され、いずれも原案どおり可決並びに承認されました。

また、昨年から会同を重ねている全体委員会の内容に関し、衣笠専務理事から説明が行われました。

①　年度報告決議案

ア　平成24年度事業報告（別添資料）

イ　平成24年度正味財産増減額報告（別添資料）

②　役員等選任決議

ア　選任理事（8名）

理事長	杉山　蕃
副理事長	藤田　幸生
専務理事	衣笠　陽雄
執行理事	小倉　利之
同	水町　博勝
理事	深山　明敏
同	臼田　智子
同	笹　幸枝

イ　選任監事（2名）

監事（留任）	伊集院雅英
同（新任）	阿部　軍喜

三　第34回特攻隊合同慰霊祭の斎行について

平成25年3月30日（土）、靖國神社において斎行いたしました第34回特攻隊合同慰霊祭は、例年より2週間も早い桜の開花（靖國神社の標準木の開花宣言は3月16日）であったため、満開の時期は過ぎておりましたが、散り残った桜花の下、厳粛盛大に執り行われました。参列者も昨年と同じ２００名以上の多数に及びました。心より感謝申し上げます。詳細については、本会報『特攻』第95号に掲載されていますので、省略させていただきます。

平成24年度事業報告

一　慰霊事業

1　第33回陸海軍特攻隊合同慰霊祭等

平成24年3月24日靖國神社において斎行した。参列者は、遺族26名を始め来賓、戦友、一般会員等合計２２３名が参列して、英霊奉慰の誠を捧げた。

慰霊祭終了後、アルカディア市ヶ谷において懇親会を実施した。今回特に、永年にわたり慰霊祭の演奏奉仕を務めた田櫓雅之（トランペット奏者）、鈴木隆春（サキソフォーン奏者）の両氏に対し感謝状を贈呈した。

2　第61回特攻平和観音年次法要

例年どおり秋分の日の9月22日、世田谷山観音寺において、同寺と地元駒繋神社との神仏習合による年次法要が営まれた。当顕彰会としては、主要な一大事業であり、同寺が主催する年次法要に全面的な協力を行った。

年次法要の参列者は、来賓25名、遺族25名、会員等１６９名、総数２１９名で、昨年より69名減少したが、例年参加していた軍装会の不参加、ご遺族の減少、並びに今年は秋分の日が例年と異なり9月22日であったこと等を考慮すれば、ほぼ例年どおりの参列状況であった。

3　各地慰霊祭への参列等

ア　代表者派遣

（実施月日）	（慰霊祭等名）	（場　所）	（参列者）
4月4日	豫科練雄飛会慰霊祭	靖國神社	小倉評議員
4月6日	都城特攻慰霊祭	宮崎県都城市	秋山評議員
4月7日	徳之島慰霊祭	鹿児島県大島郡	藤田専務理事
4月8日	萬世特攻隊慰霊祭	鹿児島県南さつま市	水町評議員
4月9日	鹿屋特攻隊慰霊祭	鹿児島県鹿屋市	笹理事
4月16日	出水特攻慰霊祭	鹿児島県出水市	及川評議員
5月3日	知覧特攻隊慰霊祭	鹿児島県南九州市	衣笠理事
5月26日	義烈空挺隊慰霊祭	沖縄県糸満市摩文仁	倉形評議員
5月27日	豫科練戦没者慰霊祭	茨城県稲敷郡	藤田理事　他3名
7月7日	大東亜慰霊協慰霊祭	靖國神社	杉山理事長
9月12日	市ヶ谷台慰霊祭	防衛省市ヶ谷駐屯地	水町評議員
10月13日	串良基地戦没者慰霊祭	鹿児島県鹿屋市	倉形評議員
11月11日	回天大津島慰霊祭	山口県周南市大津島	飯田評議員

イ　供花送達等

（実施月日）	（慰霊祭等名）	（場　所）
4月3日	宮崎特攻基地慰霊祭	宮崎県宮崎市
4月7日	海上特攻第二艦隊追悼式	鹿児島県枕崎市
4月22日	靖國神社春季例大祭	靖國神社
5月7日	黒島特攻平和祈年祭	鹿児島県三島村
5月28日	千鳥ケ淵墓苑拝礼式	千鳥ケ淵戦没者墓苑
9月28日	明野忠魂塔慰霊祭	陸上自衛隊明野駐屯地
10月10日	原町飛行場戦没者慰霊祭	福島県南相馬市
10月18日	靖國神社秋季例大祭	靖國神社
10月18日	千鳥ケ淵墓苑秋季慰霊祭	千鳥ケ淵戦没者墓苑
11月7日	若潮会慰霊祭	靖國神社

ウ「特攻勇士之像」奉納除幕式

（実施月日）	（奉納場所）	（参　列　者）
4月28日	京都霊山護國神社	藤田専務理事、羽渕事務局長
12月8日	福岡縣護國神社	杉山理事長、廣嶋理事、平野会員

二　「特攻勇士之像」建立事業

本年度の「特攻勇士之像」建立事業においては、前記京都霊山護國神社及び福岡縣護國神社の二体を建立奉納した。今回の建立奉納で、世田谷山観音寺への建立奉納分を含めて総計12体となった。

来年度以降については、埼玉県護國神社への建立奉納の具体的計画が進んでいる。

三　その他の事業

1　広報事業として機関誌・会報『特攻』第90号～第93号を発行し、会員、協力団体及び希望者等に頒布した。会報は、ホームページでの閲覧、印刷出力が可能である。また、情報公開上の観点から、事業計画及び財務関係資料等を公開している。

2　出版事業では、平成20年度に刊行した『特別攻撃隊全史』及び『特別攻撃隊全史　追補版』並びにＣＤ『あゝ特攻』等を引き続き頒布した。

四　会員の動向

平成24年度の新規入会者は90名であり、死亡等による退会者が２７３名であったため、会員数は差し引き１８３名の減となり、平成24年度末における会員数は、２３１６名となった。

今年度は特に、旧軍関係者の高齢化による退会が多く、世代交代の時期でもあった。当顕彰会においても、今年度は、山本卓眞前会長、菅原道熙前理事長、栗原宏監事という、会の中枢の3名を失ったが、会員一同旧軍関係者の意志を継承すべく、決意を新たにしているところである。また、顕彰会の若返りを図るべく若手会員の募集等を検討している。

平成２４年度正味財産増減計算書

平成２４年１月１日から平成２４年１２月３１日まで　(単位：円)

科　目	２４年度決算	前年度決算	増　減	備　考
Ⅰ　経常増減の部				
1　経常収益				
①　基本財産運用益	8,369,400	6,831,214	1,538,186	運用益増加
②　特定資産運用益	154,373	80,078	74,295	
③　受取会費	5,534,000	5,923,000	△ 389,000	会員数の減
④　慰霊事業収益	2,988,000	3,504,000	△ 516,000	会員数の減
⑤　出版事業収益	128,100	419,180	△ 291,080	会員数の減
⑥　受取寄付金	2,748,000	2,742,000	6,000	
⑦　雑収益	40,600	0	40,600	
経常収益計	19,962,473	19,499,472	463,001	
2　経常費用				
慰霊事業負担金	968,095	672,000	296,095	
像制作負担金	1,589,260	599,750	989,510	建立数増
発送等委託費	1,424,086	1,531,541	△ 107,455	
支払助成金	1,971,720	2,534,000	△ 562,280	参列者の減
役員報酬	320,000	280,000	40,000	
給料手当	3,444,580	3,626,850	△ 182,270	
退職給付費用	0	455,000	△ 455,000	
福利厚生費	483,064	560,634	△ 77,570	
旅費交通費	2,010,270	1,891,300	118,970	
通信運搬費	453,676	437,196	16,480	
減価償却費	183,648	169,230	14,418	
消耗品雑費	684,202	153,738	530,464	事務所移転関連
印刷製本費	2,324,322	3,140,982	△ 816,660	印刷部数減
会議費	138,416	191,812	△ 53,396	
光熱水料費	77,652	85,452	△ 7,800	
賃借料	1,417,060	1,226,136	190,924	
諸謝金	271,000	70,000	201,000	
租税公課	0	52,500	△ 52,500	
雑支出	701,638	0	701,638	事務所移転費
退職資産繰入費用	192,333	0	192,333	経常外科目から
経常費用計	18,655,022	17,678,121	976,901	
評価損益等調整前経常増減額	1,307,451	1,821,351	△ 513,900	
基本財産評価損益等	4,330,281	137,652	4,192,629	運用益増加
特定財産評価損益等	0	0	0	
当期経常増減額	5,637,732	1,959,003	3,678,729	
Ⅱ　経常外増減の部				
1　経常外収益				
減価償却引当資産増	0	129,800	△ 129,800	
退職資産繰入費用	0	455,000	△ 455,000	経常科目に
経常外収益計	0	584,800	△ 584,800	
2　投資活動支出				
貯蔵品資産償却	83,982	128,023	△ 44,041	
退職引当資産取得支出	0	305,000	△ 305,000	
経常外費用計	83,982	433,023	△ 349,041	
当期経常外増減額	△ 83,982	151,777	△ 235,759	
当期一般正味財産増減額	5,553,750	2,110,780	3,442,970	
一般正味財産期首残高	10,585,313	8,474,533	2,110,780	
一般正味財産期末残高	16,139,063	10,585,313		
Ⅲ　指定正味財産増減の部				
一般正味財産への振替	0	0		
当期指定正味財産増減額	0	0		
一般正味財産期首残高	274,400,000	274,400,000	0	
一般正味財産期末残高	274,400,000	274,400,000	0	
Ⅳ　正味財産期末残高	290,539,063	284,985,313	5,553,750	

事務局からの報告等

寄附者御芳名（敬称略）

（平成25年1月1日～3月31日）

（単位千円）

一〇〇〇　多田野　弘
三〇　小松　利光　一五　降矢　達男
一〇　中村光太郎　一〇　信平　勝雄
一〇　松井　敬子　一〇　後藤　賢治
一〇　大井　路雄　一〇　杉山　蕃
一〇　小堀桂一郎　一〇　大穂　利武
一〇　西　正昭　一〇　高田　耕治
一〇　松本　司　一〇　原島　淳子
一〇　久保　魏　一〇　矢吹　朗
一〇　宮本　了吾　一〇　山根　秋男
一〇　菅原　道之　一〇　水気　博美
八　辻　外文　七　佐藤　幸一
七　原町飛行場戦没者顕彰会
七　上原　富次　七　島田　幸正
七　荒井　志朗　七　椿　孝則
七　市川　雄一　七　中江　仁
七　吉元　忠　七　大沢　俊夫
七　折下　寛法　七　高橋　光弘
七　武谷　孝生　七　中島　尚史
七　百目鬼　清　七　原　武廣
七　原　照寿　七　岩崎　淳治
七　堀江　正夫　七日比野臣三郎
七　古明地正雄　七　奥　正則
七　丸井　容子
七　上村　貞蔵
七　尼子　和世
七　服部　武志
七　松中　義昭
七　藤元　正明
五　自在丸庫一
五　川岸　義視
五　飯岡　哲子
五　駒井　満男
五　日高　誠
五　中村　貞三
五　下出　忍
五　中村　栄造
五　渡部　利久
五　斎藤　正夫
五　池田　正治
五　石原　金三
五　山田　治男
五　井上　勝蔵
五　吉田　治正
五　藤井　日正
五　森　可成
五　川床　剛士
四　河島　慶明
四　湯澤　一枝
三　臼田　智子
三　相部　一正
三　飯田　雍子
三　古屋　七郎
七　羽木さおり
七　丸原　巧
七　西本千代子
七　水内　三郎
七　國武　統士
七　早田　亮彦
五　大和　誠
五　遠藤　和子
五　新井　重雄
五　高山　友二
五　鯨井　優直
五　田辺さだ子
五　横瀬　富一
五　出雲　博
五　加藤　千佳
五　菊池　国光
五　中川　香織
五　大岡　知
五　藤井　常男
五　林　佐吉
五　岡本　巌
五　永野　博一
五　矢野　孝男
五　萩原　健一
五　小林　郁雄
三　高橋　房之
三　山川　敏雄
三　飯田　正能
三　清水　典郎
三春　仁
三　嶋本　久代
三　菊野　和郎
二　野俣　明
二　畝田謹次郎
二　住谷　定
二　阿久澤英紀
二　木村　恒雄
二　津田　治男
二　森田　由夫
二　市村　俊夫
二　岩井　良平
二　奥山　雄三
二　新井　健一
二　小川昭二郎
二　北島　昌
二　杉原　清之
二　鷹野　太輔
二　中曽根慶蔵
二　肥田木多恵子
二　町田　義雄
二　吉田　文堯
二　岡崎　宏平
二　関口晋一郎
二　中島　實
二　広瀬　勉
二　山口　宗敏
二　城ケ端　専
二　中山　石
二　佐藤　一志
二　大林　喜一
三　佐藤　義信
三　田代　義信
二　川本　修二
二　廣田　正
二　小山　義孝
二　菊地　昭夫
二　澤田江里子
二　後藤　昭一
二　深澤　欣一
二　石井　敏子
二　井出野正和
二　臼井日出男
二　土橋　猛
二　岡本　久吉
二　小貫　達雄
二　此元志津範
二　千田洋之助
二　多治見国正
二　原田　宏
一　斉藤　昭光
一　塚原　正
一　廣嶋　文武
一　大川　吉昭
一　漣　徳湛
一　杉浦　喜義
一　石本登志夫
一　川井美保子
二　加藤　拓
二　加藤　宏
二　水野　清
二　塩見　麗子
二　寺田冨美雄
二　星埜　青滋
二　丸　利郎
二　新田　和子
二　原田　義治
二　伊藤　隆啓
二　岡部　順榮
二　平田美都男
二　原口　静彦
二　児玉　芳雄
二　津覇　実雄
一　関根　賢治
一　佐伯トシ子
一　小野　好永
一　斉藤　昭光
一　佐波　優子
一　中村　猛
一　吉田ひろみ
一　大井　重平
一　山本　政親
一　上畑　幸晴
一　新　忠信
二　井出　隆夫
二　尾関　基
二　谷　功
二　新井　郁男
二　千　玄室
二　原田　洋
二　三宅　好美
二　湯川　宏幸
二　永島夘太郎
二　川人　明美
二　今井　正己
二　徳田　裕
二　山口　照夫
二　上嶋　正敏
二　市来　徹夫
一　中川　聖
一　大手　良之
一　赤羽　潤
一　土本　由紀
一　北村　昭二
二　西村　久宣

御芳志誠に有り難うございました。

◇　◇　◇

新入会員名簿（敬称略）

（平成25年1月1日～3月31日）

宮城県　洞口　智春
千葉県　長瀬　彰孝
東京都　西村　米子　佐藤　隆徳
井川　嘉江　島田　正登
小松　健太
神奈川県　渡辺　勲　阿部　隆裕
外海　信雄　長谷川史子
新潟県　吉田　浩幸
富山県　高瀬　宏司
岐阜県　加藤　重樹
滋賀県　小山内伸介
京都府　河内　昭賢
広島県　石川　文伸　江原　誠
山口県　渡辺　雅春
熊本県　岩永　誠
宮崎県　宮崎護国神社

◆　◆　◆

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の意を捧げます。

宮城県　後藤　昇（24・12・1）
群馬県　田中　量平（25・1・14）
埼玉県　西　義光（25・1・31）
高橋　守村
高畑　易
千葉県　倉重　翼（24・12・23）
東京都　腰塚　守正（25・1）
井川　静男（24・1・13）
鈴木　俊夫（25・1・19）
福田　一弥（24・10・17）
八島　康次
緑川　浩（25・3・3）
花見　重一
小松　利光
長野県　斉藤　昭男（24・10）
静岡県　鈴木　保
大阪府　磯野　孝市（24・3・8）
奈良県　白石　正（24・6・23）
鳥取県　高橋　義文（24・6）
愛媛県　俊成　俊弘
福岡県　佐藤　正典（24・11・19）
山内　昭三（24・2）

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革

昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化
昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足
初代会長　竹田　恒徳　元宮様
二代会長　瀬島　龍三　氏
平成5年11月財団法人認可
三代会長　山本　卓眞　氏
平成23年1月公益財団法人認定
現理事長　杉山　蕃　氏

○当顕彰会の主な事業

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
・広報誌等の発刊
・講演会等の開催その他

○年会費

・一般会員　3000円
・学生会員　1000円

〒102－0073
東京都千代田区九段北3－1－1
靖國神社遊就館内　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03－5213－4594
FAX03－5213－4596

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1　原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願いします。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。

3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4　原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5　会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛としてください。

記

〒102－0073
東京都千代田区九段北3－1－1
靖國神社遊就館内　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03－5213－4594
FAX03－5213－4596